
天使の堕ちる夜

水芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の堕ちる夜

【Nコード】

N2207J

【作者名】

水芙蓉

【あらすじ】

魔獣狩りを生業とする男イトは、森の中で一人の娘を拾う。

所縁ある者として、仕方なく助けることになった娘は、天使のような姿のアオイ・オールドという伯爵令嬢だった。

見た目だけでなく、中身もどこか浮世離れた娘に戸惑いつつ、イトは彼女を帝国キリングシックへと届けるために、歩き始める。

『軍神の花嫁』のスピノフ。大方の予想（？）を裏切って、サクラの妹のアオイの話です。イトも『軍神の花嫁』にちらりと出てきます。

第1夜

どす黒く広がるのは血の海。異臭を放つのは、無残に食い千切られた屍。毛皮に覆われたいくつもの動かぬ個体は、今しがた己の剣で狩ったばかりの魔獣達だった。

か細い月の光に浮かび上がる、男にとっての見慣れた光景。

人々が地獄絵図だと語る日常の中に、しかしながら今は異質な存在が一点。

光を放っているかのように見える『それ』は、ただ静かに座っていた。

魔獣に突き立てた剣を、無造作に引き抜きながら、イトは『それ』を眺めた。

少女か娘か。

いずれにしろ若い女だ。

身動き一つしない。

一瞬、既にこと切れているのかと思った。

しかし、僅かに上下する胸元に、『それ』がまだ命のある存在であると知る。

厄介事に首を突っ込んだ。

そう思わずにはいられなかった。

間もなく、ここには屍の匂いを嗅ぎ付けた魔獣や獣が集まってくる。

ここに、『それ』を捨て置けば、数時間と生き長らえることなく、

この光景のごく自然な一部になりえるだろう。

正気を失っているならば、それも良いかもしれない。

「おい」

イトは声をかけた。

俯いていた『それ』が、反応してゆっくりと顔を上げる。

状況を一瞬にして忘れさせる『それ』は……天使。

神などハナから信じていないイトでさえ、不覚にもそう思った。僅かな月明かりの元でも、『それ』は輝くばかりに美しかった。乱れていても煌めきを失わない金の髪。陶磁器のような…否、それより、なお、なめらかな白い肌。あらゆる芸術家が、どんなに腕を競うとも、これ以上の作品を生み出すことはできないだろうと、そう思わせる端麗で、優美な目鼻立ち。

そして、何よりも。

『それ』は人外の者であるように。

『それ』こそが、この惨状の主であるかのように。優雅に艶やかに微笑んだのだ。

イトに向かって。

背筋がゾクリとするほどの美しさで。

「あんた、正気か？」

思わず尋ねると、『それ』は再び俯いた。

「…分からない」

呟く声は、イトが知るとの女よりも透き通っていた。

「名前は？」

尋ねた。

知るためではなく、正気を確認するために。

「アオイ・オールド」

確かな答えに、正気を知る。

しかしながら、どこかで聞いた名と、そして、天使を彷彿とさせる姿に、思い至ったことが事実ならば、厄介事を抱え込む覚悟をせざるを得ないだろうと重い問いを口にする。

「キリングシークの軍神妃の妹か？」

彼女は、少しの間をおいて頷いた。

ならば、まさか捨てて行く訳にもいかない。

つい零れたのはため息だ。

キリングシークの『漆黒の軍神』。かの男はイトが自らの意思で跪く唯一の存在だ。

その寵妃の妹を捨てていくことは、いくら無法者を自覚するイトでもできない。

「立て…ここから離れるんだ」

座り込んだまま、彼女はイトを見上げた。

付いて来るか来ないかは、彼女次第。付いて来ないなら、それまでだ。

己の姿かたちが、貴族の子女の信頼を勝ち得るものでないことを、

イトは重々承知している。

イトは判断を彼女に委ねた。

見下ろすイトの目の前で、彼女は立ちあがる意思を見せた。

身じろぎ、膝をつき、しかし、それが崩れる。

その途端、彼女の瞳から涙が溢れ出た。

それが、イトに天使の幻影を振り払わせた。

「…立てないの」

訴えてくる姿も、美しくはあったが人外ではない。

イトは、アオイの腕を掴んだ。

がくがくと震えている。右手にある剣よりも、恐怖で硬直している

アオイの体の方が硬いように感じられるほどに。

先ほどの微笑みと裏腹に、アオイは恐怖に支配されているのだ。

ならば、これは人。

どんなに天使のように美しかろうとも、かろうじて正気を保っているだけの普通の人間だ。

イトは、屈むとアオイを担ぎ上げた。

普通の人であることを認めたのは、つい先ほどのことなのに。

腕や肩に感じる体は、羽があるのではないかと疑うほど軽かった。

アオイを担いだまま、かなりの距離を歩き続けた。

今夜中に森を出ることは無理だとしても、あの惨状からはできるだけ離れておくべきだ。

イトに大人しく抱かれている体は、最初こそガクガクと震えていたが、時間が経つにつれ少しずつ強張りを解いていった。徐々に柔らかさを取り戻していく体を下ろして歩かせようかとも思ったが、続けるように首に回された腕がそれを躊躇わせ、結局イトはアオイを抱いたまま歩いた。

適当な場所を見つけ、アオイを下ろす。

離れようとするが、細い指がギュツとイトの衣を握ったままだ。

「別に置いていきやしない」

言うが、アオイの指は離れない。

「離れないの」

本人も戸惑っているように言う。

イトは無慈悲に、力でその手を外した。

アオイの手は、イトの衣を握っていた形のままで膝の上に落ち、その視線は、硬直したままの指先をじつと見ている。

イトは立ちあがり、近くに散らばっている枝を集めて積み上げた。パチンと指先を鳴らすと、小さな獣がイトの懷から顔を出す。

リスに似たそれは、主に呼ばれたのを喜ぶように跳ねながら、先ほどまでアオイがいた肩へと登る。

「遊んでないで、火をつけろ」

命じると、積まれた枝に駆け寄り、息を吹くように口元から小さな炎を出した。

炎が立ち上がったことに満足するかのように小さく鳴いた獣は、イトの肩へと戻ってくる。

「ちゃんと見張ってるよ」

イトが寝めるように獣の鼻先に口付けると、チツと小さな声で鳴いたそれは、一本の木の上に登っていた。獣が登っていった木の根元に、イトは腰を下ろした。

手を伸ばしても届かない程度に離れて、アオイ・オールドルがいる。少女か、娘か。

改めて見てみても、はつきりとは分からない。

分かっていることは、彼女が飛びぬけて美しい容姿を誇り、そして、イトとは本来知りあう筈もない貴族の娘だということだ。

「あんたをどこに届ければ良いんだろうな？」

イトの言葉に、彼女は微笑みかけて、それに失敗した。止まっていた涙が再び零れる。

「私…分からない」

「…どこに行く途中だった？」

アオイは首を振った。

それも分からない、ということか。

一体、なんなのだ？

この女は、なぜ、こんなとこにいるんだ？

あの魔獣に喰われたのは…既に人であることさえ定かでないほどズタズタだったが、この女の何なのか。ショックを受けてはいるようだが、連れと思われる人間が骸と化したことを嘆いているようではない。

イトはため息をついた。

とりあえず、キリングシークの軍神に報告する以外にないだろう。

「…寝る。今、あんたにできるのはそれくらいだ」

言いながら、自身のマントをアオイに放り投げた。

アオイは、しばらくイトを見つめていたが、そのマントを引き寄せ、横になった。

眠れないだろう、とは思った。

この状況で眠れるほど、この女が図太いとは思えない。

イトから少し離れたところで、アオイは瞳を伏せてはいるものの、その体は再び震え続けている。

「…怖い…」

アオイは青ざめた顔で囁いた。

恐怖で怯えた顔さえも、美しいのか。

イトは小さくため息をついた。

「…怖くて当たり前だろうが…この状況で笑ってられる方がおかしいんだよ」

彼女は、目を開けてイトをじっと見つめた。

彩りは緑。身が竦むほどきれいな瞳だった。

「…だって…皆が微笑んでなさいって言うの…そうすることが私の役目だと言うの」

なんだ、それは。

イトは呆れた。

とは言え、この美貌ならば、それもありなのだろうか。

この女が微笑むだけで、幸せになる人間はいくらでもいるのだろう。それこそ、天使のように、微笑み一つで人を導くことができるのかもしれない。

だが、天使ではないのだ。

人としての感情があるだろう。

その感情を押し殺してまで、微笑んで何になるのか。

「微笑む必要なんてない」

イトは言った。

アオイは、意外なことを言われたと言わんばかりに目を見開いた。

「怖がつて…震えていりゃいい。そのうち夜が明ける」

続けた言葉に、アオイは素直に頷いた。

体にかけてあったイトの衣を引き寄せて、身を縮める。イトの大きなマントは、彼女の体をすっぽりと包み込んでいたが、その布地の中で、小さな体が恐怖に戦慄しているのが判かった。

「それとも…」

緑の瞳が開かれて、再びイトを見る。

「来るか？」

腕を広げた。

もちろん、本気ではない。

ちよっとふざけただけだった。

誇り高い貴族の娘が、無頼者の戯言にどんな反応を示すのか。
怒るか、恥じるか。

だが、アオイは身を起こしたかと思うと、僅かに戸惑う素振りさえなくイトの腕の中へと滑り込んできた。

「…おい」

硬直しながら、イトは呆れる。

アオイは、ただ、イトの胸元で震えている。

そこには、女として男を誘う素振りの一欠片もない。
暗闇が怖い、と親のベッドに潜り込むただの子供だ。
イトはため息をついた。

今日はいつたい、何度ため息をつけば終わるのか。

「しょうがねえか」

乗りかかった船というやつだ。

無事にキリンググシークに送り届けてやろうではないか。

軍神に貸しを作っておくのも、悪くはない。

そう思い、木に寄りかかりながら、左手にアオイを抱き、右手に剣を引き寄せた。

アオイはイトに抱かれながら、瞳を伏せた。なんとか眠りにつこうとしているようだ。

こんな時、親ならばどうするのだろう。

両親を知らずに育ったイトには、それが分からなかった。

だから、抱きついてきた体をやんわりと抱きしめた。

欲望のない抱擁など、初めてだ。

しばらくすると震えていた体が落ち着いていき、やがて、その呼吸が穏やかで大きなものに変わった。

「オードルの天使…か」

出会ったばかりの男に、美しい寝顔を晒しながら抱かれて眠る娘は、確かにそう呼ばれるのが相応しいと思わざるを得ないほど美しく。
そして、人とは遠くかけ離れた存在に思えた。

キリンググシークにて

カイ・ラジル・リューネスは、一段低い床にひざまずき、頭を擦りつけんばかりに平伏する男を見下ろしていた。

カイは、決して激昂する性質の男ではない。しかし、『漆黒の軍神』として名を馳せ、まして、実際に戦において、無慈悲に兵士を斬る姿を知っているこの男にしてみれば、今この時はまさに死を目前にしている思いに違いない。

「…では、この密告書にある通り、アオイ様は行方不明なのですか？」

問うたのは、カイではなく、重臣の一人だった。ハクという最年長の宰相は、日頃の議事において、自ら進んで話すことは滅多にない。凜とした姿で座り、議事の行方を見守っているのが常だ。

しかし、この場において、彼は話さぬ訳にはいかない立場にあった。

「申し訳ございません！」

男は、これ以上は下がらないと思われた頭を、更に下げるように身を低くした。

過去に、この男がどれほど尊大な態度で同じ場所に立っていたかを思い出しつつ、ハクはそつと玉座を見やった。

そこには先頃、戴冠式を経て名実共に皇帝となったガイが、静かな視線をハクと男に注ぎながら座っている。その弟であるカイもまた、感情に流される気配など微塵もない悠然たる姿で、玉座の横に立っている。

キリンググシークの双璧の姿に、満足と安堵を抱きながら、ハクは「して？」と男を促した。

「全力を挙げて捜索中でございます」

ただし、内密に、か。

男が言わなかった言葉を心の中で付け加えたのは、ハクだけではない筈だ。

アオイ・オードルが行方不明だと知れたのは、つい先ほどのこと。しかしながら、天使と呼ばれるほどの美しさを備えた娘が姿を消してから、既に時は10日を経ているというではないか。

「…今回の謁見については、そちらが強く所望されたものでしたな？」

ハクの言葉に、男はその少々太った体を震わせた。

「警備には万全を期しておりました」

弱々しい声で言うこの男は、同盟国イルドナスの大使だった。

イルドナスは、同盟国の中でも有数の大国だ。過去には、キリングシークを脅かした国の一つでもある。

争いに終止符を打ち、前王はキリングシークへの忠誠を誓ったが、少し前に跡を継いだ現王は、その若さゆえか、少々血気盛んなところが見受けられる。ことあれば、キリングシークに取って替わろうという目論見が垣間見え、両国の間には嫌な緊張感が漂い始めていた。

そんな状況の中で、イルドナスから思いがけない申し入れがあったのだ。

アオイ・オードルを王妃として迎えたい。

天使の異名を持つ伯爵令嬢の噂は、国内に留まらず各国に広まっている。しかも、今や彼女にはその美しさだけでなく、『漆黒の軍神の寵妃の妹』という付加価値まで付いてくる。となれば、彼女の身上は既にオードル家の手を離れ、キリングシークという国そのものに委ねられていると言って良い。

そして、この申し入れが国益になりえると判断し、イルドナスとの話を進めていたのがハクだった。

「厳重な警備をかい潜つての失踪。恐れながら、万が一にはアオイ様自らが…」

大使が言いかけた言葉を、ハクの穏やかな、だが決して譲らない声が遮る。

「アオイ様に限ってはそのようなこと決まっていますぞ」

老いても、さすがは大国を支える宰相だ。

恫喝された訳でもないのに、大使は慌てて平伏した。

「こうして無駄な時間を過ごすのは本意ではない」カイは静かな声で、大使を威した。怒りも苛立ちもない、だが、底冷えするような静かな低い声。

大使は体をギクリと強張らせ、震えるか細い声で「…一人…衛兵が消えております」ようやくのように語った。

「その者が…アオイ様を連れ去ったと思われます」

皇帝は傍らに立つ弟を見上げた。

「動かせるか？」

皇帝の問いかけに、何をと返すことなくカイは頷いた。

「表立って動くことは両国にとって決して得策ではありませんまい」

ハクの言葉を聞いた大使の顔に、一抹の希望が見えた。

しかし、それも冷たく見下ろす3人の視線で、一瞬にして消え去る。

「アオイは俺の方で搜そう…秘密裡に、な」

カイは兄からの問いに、大使にも分かるよう声に出して答えた。

それを聞いて、ハクの背後ですっと沈黙を守っていたカイの側近が謁見室をそつと出て行く。扉の閉まる小さな音を聞き流して、ハクは続けた。

「この失態…いかような償いをされるおつもりか。本国とじっくりお話されるが良いでしょう」

男はもう一度深く頭を下げた。

そして、真つ青な顔とフラフラする足元で部屋を退出していった。

この男が辞したのと入れ替わるようにして、二人の若者が部屋へと入ってきた。

一人は先ほど部屋を出て行ったカイの側近であるタキ。もう一人は、そのタキとまったく同じ貌をしたシキという同じくカイの側近だ。

二人は、玉座の皇帝と己の主、そしてハクにも一礼した。

それに頷きで答えつつ、ハクは呟いた。

「しかし、見つからないとは」

ため息を一つ落とし「…アオイ様ならば、連れて歩けばさぞかし目立ちましように」と続けた。

「攫った衛兵というのは…正確には騎士、しかも出は侯爵。かなり優秀な者です。名をお聞きになれば、ハク様もご存じかと思えます」
タキの言葉はあまりに予想外で、ハクはしばし返す言葉が思い浮かばなかった。

「私も幾度かまみえたことがありますよ。もっとも、もう2度と会うことはないようです」

シキが手の平を開いて、その内にあるものをハクに見せた。

ハクはそれを手に取り、少しだけ目を見張る。

「残っていたのはこれと剣ぐらいで、あとは性別も分からないほどズタズタだったそうです」

それは紋章の入った勲章だった。

イルドナスの国印と、騎士の証である剣が象られている。裏返してみると、そこにはハクも知るイルドナスの騎士の名の刻印があった。そして、本来は銀や金で細工された鮮やかなものである筈だろうに、それは全体がどす黒い汚れに塗れている。

幾度と戦に向いている老臣は、それが血であることに気がつき騎士の末路を知った。

「…一体、これは…？」

ハクはタキとシキを見た。

銀髪と碧眼の公爵家の双子は、そっくりの顔に、随分と質の違う笑顔を乗せてハクに応えた。

「アオイ様を攫った者がただの衛兵と貴族出の近衛兵では、国の権威につく傷の大きさが違います。あちらとしては、衛兵で通したいところでしょうね…往生際の悪いことです」

ハクは、玉座の背もたれに寄りかかるカイへと目を向けた。漆黒の衣装に身を包んだ皇子を、白と紫の衣装を身に付けた皇帝も眺めて

いる。

「探す必要はない」

カイはいともあっさりと言った。

「アオイはイトが拾った」

ハクは今までさほど表情のなかった面に、初めて大きな驚きを表した。

「…イトと言うと…あの隻眼の狩人でございますか？」

魔獣狩を生業とする、優秀な狩人。カイ以外の命令を一切受け入れない無頼の男だ。

「しかし、イトがアオイ様を拾ったとは？」

カイの言葉はいつも端的だ。

それですべて悟ることができるのは、兄皇帝と双子の側近ぐらいだろう。

「今朝方、イトの遣い魔がカイ様の元に参りました。こちらの紋章と共に耳飾りが届けられ、それについては先ほど、オールドル卿にアオイ様のものと確認致しました…イトの書いてきた特徴から見ても彼の保護した女性はアオイ様に間違いないでしょう」

タキの説明に「あのイトが『天使』だと書いてきてるんだ。間違いないだろ」と、イトを良く知るシキが付け加える。

ハクは、何が起きているのか、大体を察した。

そして、「この密告書は？」

手に持った書面を、ひらひらとタキに見せた。

既にそれは重要文書ではなく、小道具の一つに過ぎない。

「あ、はい。私が書きました」

子供が答えるように、手を上げたのはシキだった。

「私の筆跡はよくご存じだと思いますので」

しらっと答えるタキをちらりと見やり、その横のシキを眺め「…確かにお前の書いた書類なんぞ、とんと見たことないな」

戦では頼りになるが、日頃筆を持っているところなんぞ見たことないシキの筆跡など、確かに知らぬ。

しかし、随分手の込んだことをするではないか。

「あの国に貸しが与えたくはございませんか？」

タキの笑顔に、ハクは眉を上げた。

「イルドナスが二人を捜しているのは事実でしょう。ただ、見つけた後は…そうですね、あちらが考えそうなことは…駆け落ちの挙げ句に心中…でしょうか」

事実を知る者がいなければ。

そうすれば、アオイが自らの意思で姿をくらましたとの言い分も通るのか。

そして、イルドナスは僅かばかりの体面を保てるのだろつ。

「それを、こちらから提案する訳か？」

「…そこはあちらとの探り合いです…もちろんアオイ様は確実に保護致しますが…」

そこでタキは視線を落とした。

「いずれにしても、アオイ様には辛い状況です」

男に攫われた娘。

穢された天使の行く末は、老臣の胸にも重いものをもたらした。

できるだけのことをしてやらねばなるまい。

イルドナスの失態とはいえ、これは自身が進めていた話なのだから。ハクは、そう心を決めつつ「…ガイ様はご存じだったのですか？」

玉座にゆつたりと座り、老臣と若者の会話を聞いている皇帝に尋ねる。

皇帝は「今、知ったところだ」と、カイと良く似た、しかし、より柔らかい声で静かに答えた。

この鷹揚な態度が、他の国王を威徳するのだ。

ガイは、隣の弟に告げた。

「確かに、あの国は…少々目障りだな」

カイは頷き、タキとシキを見る。

「アオイ様はイトに預けます。こちらに向かわせてはおりますが、万がイルドナスに気づかれると厄介なことになりかねませんので、

しばらく接触は避けます」

ハクは頷いた。

「それから…少し兵を動かします」

タキの視線がシキに動く。シキは「了解」と答えた。

「秘密裡に。イルドナスの気を引く程度に…ね」

貴公子然とした端正な顔に、悪童のような笑みを乗せて続けた。

着々と進める若者達に、老臣はなんとも複雑な思いを抱いた。

軍神の側近の優秀さは重々承知しているつもりだった。しかし、それは予想をはるかに超えるものらしい。この国は、確実に世代交代を迎えているのだ。

「…私の引退も近そうですね」

それにシキがプツと笑いを零す。哀愁を振り払い、それに睨みをきかせば、タキが「…御冗談でしょう？」と微笑んだ。

「お前がゆつくりできるのは、もう少し先だ」

皇帝が言って、玉座から立った。

「この国には、まだお前が必要だ」

皇帝の言葉に、ハクは年甲斐もなく感激し、深く深く頭を下げた。

カイは台座を降りて、ハクの肩をポンと一度叩くと、そのまま扉に向かった。二人の側近がその後続く。

「カイ」

ガイの呼び掛けに、カイは振り向いた。

「お前の妃殿に、私が心から詫びていると伝えてもらえるか？」

カイは無表情のまま、小さく頷いた。

「アオイが無事に戻れば、できる限りのことをしよう」

先ほどハクが心の内で思ったことを、皇帝が口にする。

「それは…アオイが無事に戻ってからだ」

告げて出ていくカイを、ガイとハクは黙って見送った。

そう、皇帝も宰相も、今は何もできないのだ。できるのは、天使が無事にキリングシックに戻ってから。

それまでは、無頼の狩人を頼り、無事を祈るしかない。

第2日

男は言った。

「貴女は天使だ」

それは言われ慣れた言葉だった。誰もが言う言葉だった。

「貴女は天使のようだ」と。

だが、男はその後に、理解できない言葉を続けた。

「貴方は誰にも穢されてはいけない。貴方は天使なのだから」
かろうじて記憶にあるのは、そこまでだ。

アオイは、男を見つめていた。

目覚めに頭が働かないことは、いつものこと。

慣れた侍女が苦笑いを零しながら、まともに動かないアオイを着替えさせ、髪を結う。そうしている間に、徐々に頭がはつきりしてきて、身なりがすっかり整えられた頃、ようやく動き出すことができるのだ。

それが、アオイの日常だった。あの何者とも知れない男が現れるまでは。

意味の分からない言葉を語り、アオイを抱き上げたあの瞬間から、それが一変してしまった。

目覚めて飛び込んでくる景色は、いつも知らない場所。

そこがどこなのか、考えるのも問うのも無駄なこと。

どれだけ時間が経っても、頭に掛かるモヤは晴れないまま、いつの間にか現実なのか、まだ夢の中を漂っているのかさえ、分からなくなっていた。

もう、何も分からないのに。

それでも、笑みを浮かべてそこにいた。

そんな毎日だった。

ただ、今朝は少しだけ違っていた。
目の前の男。

昨日までの男がどんな姿だったか、もう思い出せない。けれど、今傍らにいる男が、昨日までの男とは違うことだけは分かっている。それが、アオイの状況をどれだけ変えるのかは、分からないけれど。

男は立つて、空を見上げている。

アオイは男の視線を追って、空を見上げた。

昨夜、男が語ったように、朝はやってきたのだ。

鬱蒼と茂る森にも、太陽の日差しは差し込んでくる。木々の隙間からは、青い空が見えた。

いや、既に朝ではない。太陽は遥かに高く、多分もう昼に近いのだろう。

そのことに気がついた自分に、アオイは驚いた。こんな風に時間の流れを思ったのは、いつたい何時が最後だっただろう？

新鮮な思いで眺め続ける空に、1点の黒が飛び込んでくる。

それは少しずつ大きくなり、やがて、鳥の形になって、男の腕に止まった。

空では点に見えるほどののに、男の腕で羽をはためかせたそれは、アオイが両手を広げたのと変わらないほど、大きく見える。男は鳥の足に結わえられている紙切れを手に取り、労うように鋭いくちばしを指先で撫でた。鳥はひと跳びして、羽を休める場所を男の肩へと移すと、アオイの存在などまったく知らぬげに、くちばしで羽を整え始めた。

アオイは視線を男へと戻した。

彼は広げた紙を睨むように見据えている。

やがて、「サシャ」と、木の上に呼び掛けた。すぐに応えて、昨夜も見た小さな獣が降りてくる。男は小さな魔獣に、読み終えた紙を燃やさせた。

「何か食べそうか？」

視線の合わされることのない、いきなりの問いかけが、自分へのものだと気がつくのに数秒。

「おい」

不審げに見下ろされながら声をかけられて、ようやく答えを求められていることに気がついた。だが、しかし、まだ頭が働いていない。男の問いの意味が良く分からなくて、ただじっと見つめる。

男は、小さく息をつくとき、アオイの前に膝をついた。肩にいた鳥が、バランスを崩して少し羽をばたつかせる。

「食えるなら、食っとけ」

言って、アオイの手に何か乗せた。立ち上がった男を見れば、彼はアオイに渡したのと同じものを口へと放り込み、一欠片を鳥と、胸元から顔を出した魔獣に与える。

倣うように、アオイは手の中のを口へと含んだ。

食べ物だ。

そう認識して、口の中で噛み、飲み込む。

急に空腹感を感じて、アオイは食べ続けた。

昨日までは、どうしていたろう？

食べていたのか。

寝ていたのか。

何よりも、生きていたのか。

手元に滴がポタポタと落ちてくる。

泣いているのだ。

昨日から、何故か涙が零れる。

理由は分からなかった。

目の前に立つ男は、何も言わない。

アオイも、何も言わず、ただ泣きながら食べ続けた。

「立て」

食べ終わってから流れ続けていた涙がようやく止まった頃、男はそう命じた。

アオイは立ち上がった。

昨日は震えて立てなかったが、今はきちんと自ら立つことできた。
ホッとしながら男を見上げる。

「歩けるな」

問いではなかったようで、彼はアオイが頷く前に背を向けて歩き出した。

アオイの鼓動が小さく跳ねる。

置いて行かれる？

そんな不安が、突如として湧き上がった。

呼びかけようとして、それができない。思わず、男が羽織ったマントを掴んだ。

男が不審げに振り返るのに、挫けそうになりながらも「貴方…名前
は？」恐る恐る尋ねた。

「…………イト」

男は答えてくれた。

ほっとした。答えてくれないかもしれないと思ったから。

「イト」

アオイが声にすると、イトは奇妙な顔をした。不快という訳ではないようだが、決してアオイが名を呼んだことを快く思っている訳ではなさそうだ。

それにまた不安を煽られて、マントを掴む指に力がこもる。

「他に聞くことはないのか？」

厳しい視線に、知らず笑みが零れていたらしい。

「…笑わなくていい」

冷たく言われて、頬が強張る。

「あんたが笑わなくても…何も変わらない」

イトが言う。

そう言われてもどうして良いか分からない。

アオイはマントを握ったまま、イトの後について歩き出した。

森の奥深くから人が行き交う道へと出たイトは、彼女が掴んでいた

己の薄汚れたマントを、彼女自身に被せてその姿を隠した。
目立つ。

思わず舌打ちが出た。

イトとて、特徴のある容姿と大きな剣を背中に背負った姿が人目を引く。

だが、この娘は、目立ち過ぎた。

若い男は言うに及ばず、女も子供も年寄りも、この娘に釘付けになる。

すれ違う瞬間にボーッと見とれる者。目を見開く者。下手をすれば、拝む連中までいる始末だ。

彼女はといえば、そんな視線に慣れ切ってるのか、一向に気にする素振りもない。

恥じるでもなく、誇るでもなく、少し俯き加減にただ黙々とイトについて歩いた。

日が暮れかかった頃、イトは森を出る少し手前にある大きな屋敷の扉を叩いた。

今日は当初からここが目的地だったが、こんなに早く到着することができるとは正直思わなかった。

アオイが、文句も泣き言もなく、従順に一日を歩き続けるのは予想外だったといって良い。貴族の令嬢が、慣れない森の中を歩くのだから、多少ごねられるのを覚悟していたし、それなりに休ませるつもりもあったのに。

しかし、アオイは歩き続けた。

ただただ従順に。

「待ってたよ」

自ら扉を開けてイトを出迎えた屋敷の女主人は、突然の訪問にも係わらず、年齢不詳の面に笑みを浮かべた。

「久しぶりだねえ」

嬉しそうに近付いてくると、親愛の溢れるキスを目元の傷に落とす。会ったびに必ず行われるその行為を、しかしながらイトはいつまで

も慣れずに、慥然と受け入れることしかできない。

「隻眼の男が死んだとは聞かないからね…生きているとは思ったけど」

言いながら、視線はイトの背後にひっそりと立つアオイを捕らえる。
「この娘をあんたが拾うとはねえ…さすがにあたしも予想外だったよ」

全てを知っているかのような口調。

しかし、それも女の正体を知っていれば納得せざるを得ないから、イトは何も言わない。

この女を、女神と呼ぶ者もいれば、悪魔と呼ぶ者もいる。

イトと同じ色を持つ銀の髪と紫の瞳。イトよりも幾分色の浅い、だが、他民族に比べれば浅黒い肌。

領土を持たない流浪の民族の特徴をあまりにも顕著に備えた姿は、美しいが故に時に忌み嫌われ、時に畏怖を抱かせる。

だが、女の呼び名は、その容姿に所以するものではない。この女は正真正銘そう呼ばれるに相応しいのだ。

女は、イトから離れて、すっぽりとマントに覆われた娘に近付いた。そして、フードを外す。

現れたアオイは疲れ果てているようだったが、やはり天使のように美しかった。

対峙する二人の女は、共に人外のようなうだ。

「ようこそ、天使殿」

女が言うアオイは条件反射のように微笑みを浮かべた。

「なるほどね」

アオイの笑みを受け、それよりも妖艶な笑みを返しながら女は呟いた。

アオイの額から頬を女の指が辿る。優しい仕草で、ほつれている金髪を撫でつけた。

「あたしはウスラヒ。イトとは昔からの知り合いだよ」

ウスラヒは、アオイを見つめながら続けた。アオイもまた、うつす

らと微笑みを乗せたまま、ウスラヒのするに任せている。

美しいが、どこかぞつとさせる景色だった。

「疲れただろう？湯浴みをして、着替えておいで」

その言葉に、アオイは何故かイトを見る。どうすれば良いのかと問うようなそれに、答える違和感を覚えながら「そうしろ」とイトは促した。

ウスラヒの呼び掛けに応えて、侍女二人がアオイを隣室へ連れて行くこうとする。イト自身もまた身を清めようと歩きかければ、衣が引っ張られた。

振り返ると、アオイがイトの衣を掴んでいる。

微笑んではない。微笑まないとき、この娘は無表情だ。

涙を流す時でさえ、滴が零れるだけで表情はなかった。そのことに、どという訳か少し胸が痛む気がして、目を逸らしたのは昼のことだ。

「…どこに行くの？」

ギュツと指に力が入ったのを見逃さない。

不安？

何が？

この屋敷内ならば、安全だ。森とは違う。

「俺も、別の部屋で湯浴みするだけだ」

アオイは納得したのか、頷いて、手を離れた。

隣へ消えたのを確認してから、部屋を出る。落ちるのは、また、ため息。

『どこに行くの？』という問いは、イトが出ていく時ではなく、己が歩き出した時に口にすべきことだろうに。

あの娘が尋ねたのはイトの名のみ。

何者かを質そうとはしない。

どこに向かうかも問わなかった。

ただ、大人しくついてくる。

何を考えているのか。

あの娘に、身を守る本能はあるのか。

「随分、懐かれてるねえ」

一緒に部屋を出たウスラヒが面白そうに言う。それを無視して「あの娘、知っているのか？」と問う。

「知っているよ。天使だ」

イトは眉を寄せた。

「人だ」

ウスラヒは微笑んだ。アオイの微笑みとは違う、謎めいてはいても感情のある笑み。

「どうだろうね」

言葉も謎。

「人だよ。天使なんかじゃねえ」

言いながら、それは自分に言い聞かせているようだ。

神などいない。もちろん、悪魔だっていない。そして、天使もいる筈がない。

何度も実感しているそれを忘れて、アオイを天使かと疑う瞬間は一体何度あっただろうか。

今、つい先ほども。

「天使なんていねえよ」

イトは言うつと、乱暴に衣を脱ぎ捨てながら湯浴みをするために別室へと向かった。

よほど疲れたのだろう。

食事を終えて、ソファに座っているうちに、アオイは眠ってしまった。

湯浴みを終えた肌は真珠のように滑らかに光を放っている。金の髪はまだ濡れているからと、垂らしたままになっており横たわる背中に流れている。閉じられた瞼を飾るまつ毛の長さ一つだけでも、一体どれだけの女が羨望のまなざしを注ぐのだろうか。

『オードルの天使』は、確かに天使のように美しい娘なのだ。

それは疑いようもない事実だ。

「…この娘、どうするんだい？」

ウスラヒのそれには答えない。

答えなくても、知りたいならば、いずれこの女は自ら知るだろうから。

昨夜遅く、軍神の元へ飛ばした翼を持つ魔獣は、キリングシークからの返答を携えて戻ってきた。

そこには、側近の几帳面な文字で、娘の耳元から拝借して送り付けた飾りが、確かにアオイ・オードルのものであること。イトの知らせた娘の容姿：不本意ながら『天使』という言葉を使って知らせたそれからも、拾った娘がキリングシークの伯爵家三女に違いない、とあった。

続いて、書面には端的に言葉が綴られていた。

アオイ・オードルをキリングシークへと届けること。予想通りといえば予想通りだ。

くれぐれも目立たぬように…は、それがいかに難しいかは身を以って思い知らされたが、分からぬ命でもない。

だが、暫くキリングシークとの連絡は断つように、とは意外だった。遣い魔の後を追って、使者が現れるくらいのこともあるかと思っていたのだ。

ところが、この書面によって、軍神はアオイの身柄を完全にイトに預けてきた。

詳しいことは書かれていない。

ただ、この状況が決してアオイ・オードルの本意ではないこと。

万が一、彼女の身に危険が差し迫った状況が訪れるならば、相手が誰であれ排除しろとある。

そして、魔獣に喰い荒された肉片の中から、イトが拾い上げた一つの勲章。アオイの耳飾りと共に軍神に送ったそれが、某大国の騎士のものであることに気が付いていたイトが、書かれていることから書かれていない背景を想像することは難しいことではなかった。

しかし、あえてそこに考えは巡らせない。
理由などいらぬ。

必要なことは、隠密にアオイをキリングシックへと届けること。そして、報酬は望むままに。

イトは、キリングシックの兵士ではない。自らの意思で、キリングシックの軍神に剣を預けた魔獣の狩人だ。魔獣狩り以外の命令に従う理由はない。

だから、こんなことはまったくもって厄介事に他ならない。
それでも、イトは昨日のうちに既に心を決めている。

この娘は無事にキリングシックに届ける、と。

決めたからには遂行する。イトはそういう男だった。

「…この娘…空っぽだね」

不意にウスラヒが呟いた。

アオイに毛布をかけてやりながら「天使なんて呼ばれるにはね、それなりの理由があるものだよ」と続けた。イトは、グラスに入った琥珀の液体を口に含んだ。

この屋敷でしか出されないそれは、ひどく懐かしい味がする。

「この娘、何も見えないよ。自我も意志も感情も…全部ばやけてしまっている」

だから？

「…フワフワと陽炎みたいな娘だね。近付いても近付けない厩気楼かもしれない…そんな不安定さが、この娘を天使にするのさ」

陽炎ではない。

厩気楼ではない。

イトはアオイを抱きあげ、抱きしめた。

それは生身の体だった。

だが、ウスラヒの言うことは分かる気がした。

イト自身、アオイが人として何かが欠落していると感じるたびに、天使の存在を疑ったのだから。

だとすれば、『天使』などという言葉は、称えているものではない

のではないか？

「それがこの娘の元々の資質なのか、それとも…周りがこの娘をそうしたのか」

見下ろすウスラヒの前で、突然、アオイの体がピクリと震えた。

閉じていた筈の瞳が、かつと開かれ、体がビクリと跳ねあがった。

「…いやあ！」

悲鳴が上がる。

「…人らしくなったじゃないか」

のんびりと呟くウスラヒを押しつけて、イトはアオイに近付いた。

アオイはイトにも怯えるように、体を丸めガクガクと震えている。

「落ち着け」

声をかけながら、そつと肩に手を置く。

「やあ！」

それを振り払う勢いで、ソファから落ちそうになる体をイトが受け止める。

「いや！」

暴れる体。

振り回される腕に、何度か顔をはたかれながらも、イトはアオイを抱きこんだ。

「アオイ！」

初めて、その名を呼ぶ。

娘が一瞬にして静かになる。

「アオイ」

もう一度。

アオイはイトを凝視した。

「イト？」

「そうだ」

答える。

アオイの体から力が抜ける。

だが、次には細い腕が伸ばされて、イトの首にしがみついていた。

「おい」

離そうとすると、必死に体を寄せて首を振る。

「…っや…」

緑の瞳が潤み、ハタハタと涙が零れ落ちる。

無表情ではない。

辛そうに寄せられる肩。震えて揺れる唇。

「イト！」

切迫した声に、仕方なく抱きあげて、ソファに腰掛けた。脚の上にアオイを乗せて、抱きついてくるままに受け入れてやれば、ようやく落ち着きを見せ始める。

湯浴みを終えたアオイの体からは、若い娘特有の甘い香りがした。昨夜は少女か娘か迷いもしたが、こうして寄せられる体は、間違いなく女のものだった。

しばらく、それから離れている身には、これは少々残酷な状況だ。

ウスラヒがそこにいることに、思わず感謝した。

「…私…正気なの？」

ウスラヒの言うとおり、随分と人らしいことを言う。

それでも、アオイの美しさは変わらない。いや、むしろ、無意味に微笑むよりも、青ざめて怯える姿の方が、美しい気さえした。

「さあな」

答えて、昨晚と同じように抱きしめながら「…寝ろ…それ以外、できることはねえから」

昨晚と同じ言葉を口にする。

「これをお飲み」

ウスラヒが差し出したのは、イトが先ほどまで口に使っていた強いアルコール。

イトが眉を寄せると、アオイがそれを見て首を振った。

「…いらなかい？」

アオイはコクリと頷いて、イトの胸に顔を寄せた。

「そのまま寝ておしまいな。そこなら、嫌な夢も見ないだろう」

無責任なことを言いながら、ウスラヒはイトの腕の中にいる天使に
もう一度毛布をかけた。

アオイはイトの腕の中で少しの間起きていた。
やがて、その瞳が伏せられる。

細い指がイトの上着を、やすやすと外れないほどしっかりと握って
いる。

ウスラヒが微笑んだ。からかうものではなく、謎めいたものでもな
く、本当に優しい微笑みだった。

「諦めて、そのまま眠るんだね…横たわずに眠るのは得意だろう」
そう言つて、部屋を出て行く。

アオイを抱いたまま、イトはため息をついた。

まさか二晩続けて、女をただ抱きしめて眠る羽目になるとは思わな
かった。

アオイは、深い眠りに誘われたようだ。

柔らかな身体は、完全にイトへと預けられている。

妙な気分だ。

こんな風に、信頼される謂れはどこにもない。

多分、彼女が昨日まで一緒にいた男と、やっていることは変わらな
い筈だ。

それとも、あの男にもこうやって縋ったのか。
ない話ではないだろう。

不本意な状況だったかもしれない。

僅かにも望まない腕だったかもしれない。

それでも、その男しか縋る者がなければ。

それは、生きるための手段。

それを責めることができる者などいない。

いや、そうだとしたら、イトはむしろアオイを見直す。

この女にも…人並みに生きようとする意思があるのだ、と。

第3日・朝

女の前には、大きな丸い鏡がある。

姿見よりは幾らか小さいものの、本来ならば立てて備えるべきだろう鏡は、謎めいた女の前に横たわり、神秘的な光をゆらゆらと放っている。

周りを少し丈のある黄金細工で囲まれている鏡の上には、澄んだ水がなみなみと注がれていた。

ウスラヒの指先が鏡に触れるたびに、水が揺れて屈折した光が発せられる。

これが、女が悪魔または女神と呼ばれる所以の一つ。

この女は『水鏡』の操り手だった。

帝国キリングシークの『破魔の剣』、既に滅びた国である神伽にあった筈の『鎮魂の玉』、そして領土を持たない流浪の民であり、同時に戦士の集団であるグレンダの『水鏡』。

神器と呼ばれるそれらにまつわる逸話は枚挙にいとまがないが、そのうちの2つについては事実として存在していることをイトは知っている。

「…森だね」

ウスラヒが呟いた。

過去・現在・未来。ウスラヒは、水鏡にそれを見る。

救われた者は女を神と崇め、絶望をもたらされた者は悪魔を見るのだろう。

「森をお行き」

今回のことに関して、詳しいことは何一つ話していない。

にも関わらず、ウスラヒは既に全てを承知しているようだ。

きっと、イトの知らない真実をも、知っているのだろう。

尋ねれば、ウスラヒは教える。だが、イトは尋ねない。その真実はイトには必要のないものだ。

「…少々遠回りになるけど…町はお勧めしないよ」

はなからそのつもりだったイトにとって、ウスラヒの言葉は頷くだけのものだった。

「それから、できればもう一日はここにいた方が良いね」

それは、不本意だ。

イトの心を知るウスラヒが続ける。

「今夜は雷雨だよ」

それでは、森に行くのは無理だろう。

雨。闇。雷の一瞬の光は、何の救いにもないらしい。

今夜は、さぞかし魔獣達が騒がしい一夜となるに違いない。

一人ならば、むしろ狩り日和とうそぶくこともできようが、アオイを連れてでは無謀以外のなにものでもない。

「そうでなくても、このところ、魔獣達がおかしいんだ。まあ、そんなことは、あんたの方が承知だろうが」

ウスラヒの言うとおり、おかしいことが広がりつつある。

今年の夏、初めて徒党を組んで横行する魔獣達を見た。

群れることなど知らない筈の生き物だ。テリトリー意識が強く、すれ違えば殺し合うだけだった連中が、巨大な魔獣を中心に集団で村や町に出没したのだ。

既に、その魔獣は軍神の手で葬られている。だが、同じような魔獣群の報告は後を絶たないし、イトも目にしている。

そして、それだけではないのだ。

イトのように、常に魔獣と対峙している者達の多くが気が付いている。

魔獣達が変わりつつある。どこが、とはつきりは言えない。

それでも、奴らは、何かに変化しようとしている。

「例の魔獣の件…あんたも調べてるんだろう？」

徒党を組む魔獣達については、ありとあらゆる者達によって議論が交わされていると聞いている。

ウスラヒは水鏡の操り手であると同時に、優秀な使い魔でもある。

そして、彼女は誰よりもこの世界が平和になることを祈り願っている者の一人だ。

この異様な状況を静観している筈はない。

「軍神が珍しくここに来て、詳しい話をしていったからね…視ない訳にはいかないさ。でも」

ウスラヒが険しい表情を浮かべる。

常に謎めいた笑みを浮かべる女らしくもなかった。

「分からないんだ」

ウスラヒの言葉には苦々しさが込められている。

この世の中には、分からないことの方が多いとイトは承知している。だが、ウスラヒにとっては、分からないことの方が少ないのだろうか。

全てを掌握しているかのように常に悠然と構える女が、イトの前で辛そうに眉を寄せた。そんな顔は初めて見た気がする。

「ウスラヒ？」

普通ではない。そう感じて、声をかけるとはつとしたように表情を消した。

そして、微笑む。

「もう一晚、留まりな。良いね？」

イトは頷いた。

キリングシックからは急げとは言われていない。

むしろ、アオイに無理をさせないこと。確実に安全な方法を取ってくれぐれも無理はしてくれるなど、重ねて書かれていた。

ならば、『水鏡』の操り手の言うとおり、ここに止まるべきなのだろう。

アオイは中庭にいた。

夏の日差しを避け、木陰に敷き物を広げて座っている。手元には何かしらの本が広げられていた。

ここの侍女は腕が良い。

主とはまったく違う容姿のアオイの装いは、その可憐な華やかさを一層際立てるものとなっていた。

昨日は憔悴しきった姿で薄暗い森を歩いていたとは到底思えない。どこにも、蔭りはないその姿は、明るい穏やかさに満ちている。

イトには、まるで縁のない一種の宗教画をも思わせる光景だった。あまりに遠い存在の筈の娘は、イトに気がつき顔を上げた。

「イト」

この娘に名を呼ばれるたびに感じるのは違和感だった。そして、見つめてくる瞳に、居心地の悪さを感じる。

アオイは、あまりにも、まっすぐにイトを見つめるから。

この美しい娘に、己はどう映っているのだろう。

左の面に走る大きな傷痕。異民族を象徴するような容姿。

明らかな異分子であるイトを、こんな風に無遠慮とも言える、だが、侮蔑や嫌悪が微塵もないまっさらな瞳で見つめる者は少ない。

「もう一晚、ここに留まる」

アオイは頷いた。

そして、問いかけはない。

この娘は己の境遇をどこまで理解しているのかのだろうか。

イトの方としても、様々なことが推測の域を超えない。

だから、イトからは何も話さない。イト自身が知っていることや、分かっていることを話すことは、何ら支障はないが、聞かれもしないことを語るほど、イトは饒舌ではない。

結局、二人の間にあるのは、イトの口に出さない決心と、アオイが黙ってついてくるといふ事実だけだ。

「今日はゆっくり休めばいい」

どうやら、今回もアオイは何も問うことはないらしい。

ならばここにいないことはないと立ち去ろうとする。

と、衣が引つ張られた。

もう何度目になるか知れない、馴染みを覚えつつある感覚に振り返

る。

「…おい？」

アオイが、イトの衣の裾を掴んでいた。

「貴方はなんなの？」

唐突な問いかけ。

それでも、ようやく、それが出てきたかという思いもある。

「俺は狩人だ」

答えながら、アオイの求めているものはこれではないだろうと、先を続ける。

「あんたのことは軍神からキリングシークに届けるように命じられている」

アオイはイトの衣を握ったまま、何かを考えるように…何も考えていないようにイトを見つめる。何か言いかけるように、淡く紅をひいた唇が揺れた。

己の根気強さに驚きながら、イトは待った。

アオイの次の言葉を。

だが、結局、アオイはそれを見失ったようだ。黙り込んでしまった娘は、しかし、イトの衣を離すことなく、また、視線もイトに注いだまま。

恐ろしく澄んだ瞳に飲み込まれる幻想が頭を過ぎった。

このまま、見つめられたら。

見つめられたら、どうなるのか？

その時、「チツ」と小さな声がして、イトの懷から魔獣が顔を出した。

アオイから視線を外すタイミング得た安堵など、素知らぬ風に「サシャ、大人しくしてろ」

小さな連れを柔らかく叱責する。めげないサシャは、もう一度小さな鳴き声を上げながら、アオイの膝へと飛び降りた。

それに、少し驚く。

サシャのようなタイプの魔獣は、比較的手懐けやすい。とはいえ、

やすやすと誰彼にと懐く訳でもない。

サシヤはアオイの膝の上に座ると、愛撫をねだってフワフワのタテガミを華奢な手の平に押し付けた。

アオイが…微笑んだ。

今さっき、なんとか視線を逸らしたばかりにも関わらず、再び視線はアオイに捕われる。

アオイは笑みを浮かべながら、甘える魔獣の頭から背中を優しく撫でる。

これまでイトが見てきた笑みとは明らかに違うそれ。

天使？

否、人。女。

生きている生身の娘の温かな感情に満ちた微笑み。動けない。

既に、アオイの手はイトの衣を離している。

なのに、その微笑みがイトをその場に釘付けた。

なんて…これがアオイの本来の笑みなのか？

だが、アオイはイトの視線に気がつく、スツとその表情を消した。そして、俯いてサシヤの頭を撫で続ける。

硬直していた体の力をそつと抜きながら、笑みを消し去った娘を眺めていると、アオイはチラリとイトを見て、「笑ってはいけないのでしょう？」

呟くように尋ねてきた。

イトは空を眺めた。

ウスラヒは雨が降ると言っていたが、今は雲などほとんどない青空を眺めながら、記憶を辿る。

そんなことを言っただろうか。

笑うな、と？

そして、自分自身の言っただ言葉を思い出す。

「違うな」

言いながら、アオイの前に屈みこんだ。

「笑うなどとは言っていない。笑わなくていい、と言ったんだ」

アオイの視線が再びイトに向けられる。

イトの言葉を反芻するような間が空き、「それは…意味が違っの?」
首を傾げて尋ねてくる。

アオイにとっては、どちらも言われたことのない言葉なのだろう。

その違いさえ分らないほどに、彼女は微笑むことを求められてきたのか。

「あんたはどうして微笑むんだ?」

イトは逆に尋ねた。

こんな問答は不要な筈だった。

アオイがどのような思いを抱いて微笑もうが、イトには関係のない話だ。

「おかしいからか? 楽しいからか?」

だが、言葉が続いて出てくる。

アオイは、ただイトを見上げるようにして凝視しながら、言葉を聞いている。

「それが、あんたの役目だから?」

震えながら、それでも微笑もうとする娘が言った言葉。

アオイは、頷きはしなかった。

「私が微笑むと…皆が幸せになるんですって…」

その口調に誇りや驕りはない。

ただ、現実にもう言われ、だから微笑む、と。その事実を淡々と告げるだけのものだった。

「それで良いなら、そうやって微笑んでいれば良い。確かに、あんたは天使みたいにきれいだよ。あんたの笑み一つで救われる連中は、幾らでもいるだろうさ」

微笑みだけではなく。

イトのような男でさえも、まっすぐに見つめることのできる真っ白さが。

多くの人々に天使の存在を信じさせるだろう。

そして、時に人はそういうものが必要なのかもしれない。

「…それで良かったの」

アオイは呟いた。

自然に零れ落ちた微笑み。

無自覚に浮かぶだけの微笑み。

今はどちらでもない。人形でももう少し人間らしいと思わせる無表情。

「でも、貴方は笑わなくていいと言うもの」

アオイの視線に戸惑いを見た気がした。

「あんたが笑いたくなさそうだったからそう言ったただけだ…あんたが、それで良いなら、余計なことを言ったな」

立ちあがろうとすると、アオイの手がイトの腕のあたりの布を掴んで止める。

「私…笑いたくなさそうだった？」

どうだろうか。

そう見えただけかもしれない。

先ほどの戸惑いの表情も、あの時の無理やり作ったような笑顔も。

「俺の言うことなんぞ、無礼者の戯言と捨てておけ。あんたが無事にキリングシックに到着すれば、もう顔を会わすこともない男だ」アオイの手が動く。

腕から胸元へ。

ギュツと握りしめてくる。

握られたのは衣なのに。

心臓をわしづかみされたように、息苦しさを覚える。

それは、明らかに傷ついたような顔のアオイのせいだ。

あまりにはつきりとした表情だった。

何がアオイにその表情をさせたのかは、分からなかった。

だが、これ以上、ここにいない方が良いと判断する。

早く、離れる。

でなければ。

なのに、アオイの手がイトを引きとめる。

「あんたは天使の顔して微笑んでいれば良い」

己が起こしそうな行動を留めるがために、出した言葉は思いがけず冷たい声で響いた。

止めておけ、と思うのに口が動く。

「ただ…俺は天使なんていらなから」

そう、いらなから。

救う神も、堕とす悪魔もいないと知ったあの日から。

「だから、あんたの微笑みも…俺はいらなから」

イトの言葉をアオイはただ聞いていた。

微笑みはない。

だが、イトを見つめる瞳は、相変わらず澄み切っていて。

そして、イトの衣を握る指先は、真っ白になるほど力が込められていた。

第3日・夜

夕刻からポタポタと降り出した雨は、陽が完全に落ちる頃には、激しく大地を打ち付けるものへと姿を変えた。

「もうすぐ…雷が来るよ」

夕食を終えて、窓から外を眺めていたアオイに、ウスラヒがそう教えてくれる。

アオイは頷いた。

雷は怖くない。

胸の辺りに振動をもたらす程の轟音も、空を切り裂く光も。建物の中にいれば、遠くで起こっている現象に過ぎない。

そもそも身近に起こることさえ、現実感を伴わないアオイにとって、雷であるうとも恐怖を感じる筈もない。

「出発しなくて、正解だっただろう？」

イトにウスラヒが尋ねている。

イトが何かを答えようとした時「ウスラヒ様、ツバクロとセキランが参りました」

侍女が客の来訪を告げた。

「…急ぎなのかい？」

できれば帰せと含んだ言葉に、侍女は少し困ったように眉を寄せて答えた。

「ひどく、取り乱しております」

イトは、軽く肩を竦めて「…出発すべきだったかもな」と呟いた。

そして、アオイの腕を掴むと、扉で繋がった隣室へと向かう。

アオイは、イトを見上げた。

イトはアオイを見ない。

昼間に話をしてから、イトはアオイに近付かない。視線を合わせもしない。

それは、雷よりもよほどアオイに不安定な怖れを抱かせた。

「ツバクロとセキランは、あんたを裏切らないよ」

ウスラヒの声を背中を受け止めて、イトは答えた。

「分かつてる」

答えながらも、イトはアオイを隣室に押し込んだ。

明かりの燈されていない部屋は暗い。

アオイは、暗い部屋は苦手だった。怖い、と特に感じる訳ではない。ただ、なんとなくいたいたい場所ではないだけだ。

アオイのいる場所は、いつも明りが灯されていた。

眠るときでさえ、ほのかな明かりが欠かされたことはない。

せめて月が出ていれば良いのに。

雨の夜にそれを望むことは愚かだったが、部屋はあまりにも暗闇だった。

それでも、傍らにある温かさが、その不安を和らげてくれる。

「…イト」

アオイが名を呼ぶと、イトは静かにというように、アオイの唇を手のひらで覆った。

アオイは従い口を閉じ、そっと、イトの衣の端を掴む。

それだけが、イトがアオイに許していることのような気がするから。気がつけば、手が伸びている。

笑わなくて良いという男。

天使なんていないという男。

それは、アオイを拒否する言葉なのだろうか。否定する言葉なのだろうか。

今まで知らなかったたくさんの感情の糸が、アオイの中で絡み合う。

雷は…怖くない。

暗闇も…イトがいれば大丈夫。

イトがいれば。

イトがいないと。

不安で怖くて…潰れそうになる。

どうしてかなんて、分からないけれど。

アオイには分からないことが多すぎるけど。

イトに側にいて欲しいことだけは分かるから。

こうして、彼の端っこを捉えて縋るのだ。

「ウスラヒ様！」

どれほども経たないうちに、人の気配がし切羽詰まった男の声が女主の名を叫んだ。

扉越しにも分かる慌ただしさ。

「モクレンが…子供が帰って来ないのです！」

悲鳴のような声で告げたのは女。

そのまま、女は泣き崩れたようだ。

宥める男の音がする。

扉の向こうから流れてくる不安が、アオイにまとわりついた。イトに身を寄せて、それから逃れる。

「落ち着くんだよ… いったい、どうしたんだい」

ウスラヒの男女に語りかける声が聞こえた。

「私、叱ったのです。モクレンが、剣を振るう真似事をしたので」
女がしゃくりあげるように話す。

ピクリとイトの体が揺れたのを、近くににいるアオイは気がついた。

「…小さな子供のやることだよ。深い意味はないさ」

ウスラヒが言う。

「それでも、俺たちには許されない行為なのです」

女に比べればいくらかも落ち着いている男の声。

アオイはイトを見上げた。

暗さに多少慣れてきた目が見たのは、眉間に皺を刻んだイトの表情だった。

険しい顔だった。

アオイは、イトの衣を握る指先に力を込めた。

イトがアオイを見下ろす。ようやく合わせてもらえた視線。

しばらくの間、そうして見つめ合っていた。

アオイの鼓動が少し早まった気がした。

それは、慌ただしく人の行き交う音が止み、やがて不意に訪れた静寂の中で、ひときわ感じられるようだった。

「…森だね」

静けさの中に、ウスラヒのよく響く声。

「森に迷い込んだんだ」

女の嗚咽が大きくなる。

それを聞いたイトが動いた。

アオイの手が衣を握っているのに気がつき、大きな手がそれを外そうとする。

アオイはほとんど無意識に首を振りながら、目の前の胸に身を寄せた。

「…子供が森にいる…あんたは森の暗さを知ってるだろう？」

肩を両手が掴む。責めるものではない。ひどく優しく聞こえる諭す声だった。

それに、促されるように言葉が出てきた。

「森に…行くの？ちゃんと帰ってくる？」

昼間、イトと話した時は何を聞いたら分からなくて、言葉が出てこなかった。

でも、今はスラスラとその不安を表す疑問は口をついた。

「あんたをキリングシックに届けるのが俺の役目だから」

それもまたアオイの不安を煽る言葉には違いない。

キリングシックに戻ればもう会うこともないと、イトは言ったから。それは、何故か、アオイの心をひどく乱す。

だけど、今は、イトが戻ってくるという意味を持つ言葉には違いない。

アオイはイトの手が促すのに従って、身を離れた。

「あんたは、ここにいろ…出てくるな」

言いながら、己から離れたアオイの手にイトが渡したのは、懐から出したサシャだった。

受け取って胸元に抱き寄せると、小さな魔獣はアオイの頬に柔らか

な毛に覆われた頭を寄せた。

昼間と変わらない愛らしい仕草。そして、暗闇に救いのような温もり。

だが、微笑めなかった。

イトが離れて行こうとしている今、アオイはどんな表情を浮かべることもできない。

見つめるしかできないアオイに、イトは「…大丈夫だ」

それだけ言って、扉の向こうに姿を消した。

「俺が行こう」

水鏡を覗き込んでいた3人の視線が一齐にイトに向けられる。

「イトヨウ!？」

かつての同胞が捨てた名を呼んだ。

それには何も反応せずに、水鏡の操り手に尋ねる。

「森のどのあたりだ？」

ウスラヒは水鏡に視線を戻した。

「ここから東に1キロぐらい…大きな樅の木の下」

語られる子供の居場所に、イトは舌打ちした。

「この雷の中、木の下にいるのか？」

自殺行為だ。

雨の森は、どこにも救いはない。だが、雷を避ける術くらいはあるだろうに。

イトの言葉に、セキランの嗚咽が大きくなる。

この女も同胞だった。

流浪の民。戦士の集団。そんな言葉で表現されるグレンダの一族は、男も女も生まれおちたその瞬間から、戦士として生きること余儀なくされる。幼い時から剣を授けられ、己の身を守るためではなく、対峙する者を絶つための術を教え込まれる。

金で雇われて、戦に赴く。何のしがらみもないながら、その時、敵

と教えられた者の命を、無情に奪う。

グレンダとはそういう一族だった。

それが、領土を持たない一族の生き方だった。

イトも、この二人も。

グレンダに生まれおち、そして、戦士として育て上げられ、かつては、共に戦場を駆け巡ったのだ。

だが、道は分かれた。

イトが、グレンダを捨てた時に。

全てのグレンダは、それぞれの道を選択し、進むしかなくなった。

そして、この二人は剣を捨て、大地に根付いて生きていくことを選んだのだ。

「イトヨウ」

グレンダ特有の響きを持つ名。

「その名前は捨てた」

ツバクロの顔も見ずに言えば、「…そうだったな」と呟きが聞こえる。

「子供は生きているんだな？」

ウスラヒに問う。彼女は頷いた。

「今のところ」

セキランが、更に嗚咽を漏らす。ツバクロの堪え切れない呻きが耳に届く。

母親と父親なのだ。

そして、この二人の子供が存在する。

ならば、子供も、また、純粹なグレンダなのだ。

時が時だったならば、イトが自らの手で戦士に育て上げていただろうか。

イトは、侍女が準備したマントを羽織りながら、泣き続ける女の脇をすり抜けた。

「イト」

ツバクロがついてこようとすることを、視線で制す。

戦士でない者を、剣を捨てた者を伴う気はない。森は…今もまだ戦場だから。

「…生きてることを祈ってる…俺は、そこにあるものを連れて帰るだけだ」

残酷なことを言っている自覚はある。

だが、それが現実だ。

ツバクロは「分かっている」と答え、「頼む」

深く頭を下げた。

暗い部屋の中で、アオイはサシャを抱きしめながら息を潜めている。イトがそうしろと言ったから。

窓を打ち付ける雨の音がやけに大きく響く。空に描かれる雷光が、時折、部屋の中に明るさをもたらした。

イトがいない。

それだけで、怖くなかった筈の雷さえ、アオイを追いつめる。

「アオイ、こっちへおいで」

扉の向こうで、ウスラヒが呼んだ。

出ていって良いのだろうか。

イトは、ここにいろと言って出て行った。

「大丈夫だよ、イトは怒らない」

その言葉に勇気づけられて、アオイは部屋を出た。

煌煌と明かりのついた部屋のまぶしさに、一瞬めまいを覚える。

そして、落ち着いた視界の中には、見たことのない男女が一組。男の方は顔をあげてアオイを見たが、女の方は俯いて涙を流し続けている。二人とも、イトと同じ肌と髪の色をしていた。

この部屋では、アオイの方こそが異質な存在だった。

「アオイ、こちらへおいで」

肩を寄せ合うようにしてソファに座る二人の前を通り過ぎ、アオイはウスラヒへと近付いた。

「これを見てごらん」

ウスラヒの前には何か丸いものがあつた。

近づいてウスラヒと向かい合うように座り、覗き込む。
水？

水甕にしては浅いが、荘厳な装飾の施された入れ物の中には、ゆらゆらと水が揺れている。

更に覗き込んだ水の底に、己の顔を見つけて、鏡に気がついた。

「…今、見たいものはなんだい？」

不意にウスラヒが尋ねる。

アオイは顔を上げて、ウスラヒを見つめた。

「今？」

ウスラヒが微笑みながら頷く。

「過去か、現在か…それとも未来かい？」

今、見たいもの。

それは「イト」

アオイは答えた。

この嵐のような雨の中、迷いもなく森に出向いた男。

今、見たいものなど、それしかない。

「思い浮かべるんだよ…見たいものを…鏡を見ながら」

唆すような声。

ソファに座っていた男が、身を乗り出したことにアオイは気がつか
なつた。

言われるまま。

鏡を見つめる。

微笑んでいない自分が、揺れる水の中から見つめ返してくる。
イト。

今、どのあたりにいるのだろう。

歩いている？

走っている？

子供を助けるために。

ユラリ、と水が揺れる。

アオイの顔が波に揉まれて消えて…そこに浮かぶのは。

「イト！」

アオイの感情の高ぶりに連動するように、鏡の水が跳ねた。

水面が大きく揺らいで、一瞬浮かんだマントの姿をかき消す。

「落ちていて…もう一度」

男の姿を思い描く。

多くの兵士がそうであるように、短く切り込まれた髪。今まで知らなかった彩りの肌。盛り上がる筋肉もまた、アオイが知る男達とは全く違う生き物のよう。

左の額から頬にかけて走る傷跡に左の瞳は閉ざされたまま。

残された右の瞳は紫。

細かな部分まで思い出せる男が、水面に映る。

「…見えるんだね？」

アオイは頷いた。

イトは雨が降る森を走っている。

深々とマントを被っているから顔は見えない。だが、アオイにはそれがイトだと分かった。

イトの足取りに迷いはない。

「走ってる」

時折、現れる魔獣を、足を止めることもなく剣でなぎ払いながら。

雨をも斬る勢いの刃は、一太刀で躍動を奪い、動かぬものへと変化を強いる。

そして。

「イト…見つけたわ」

アオイは見えるものを口にした。

ウスラヒの言ったとおり、子供は大木の根本にいた。

「…生きてる」

呟いたそれに、母親が何かを叫んだ。

だが、アオイにはそれは聞こえなかった。

見つめ続ける鏡の中には、子供とイト。そして、その合間に立ちはだかるのは魔獣。

降り注ぐ雨の中で、イトがフードを外した。

アオイの思い描いたとおりの面が雨に晒される。

獣は子供に背を向け、現れた敵に向き合うつと、鋭い牙を剥いた。聞こえない筈の咆哮が聞こえた気がする。

いつかの景色が重なる。

あの時。

イトが剣を構える。

そう、あの時も、彼は剣を抜いて構えた。

飛び掛かる影。

イトは剣を構え、それをあつけないほどの一瞬で断ち切る。

音のない映像は、ひどく淡々と流れていった。

だが、アオイは知っている。

肉と骨が断たれる音。

獣の断末魔の叫び。

そして、この男の強さを。

倒れた獣を跨いで、イトは子供へと近付いた。

聞こえない声が耳元に聞こえる。

「おい」

そう彼は声をかける。

子供は顔を上げた。

あの時の、アオイのように。

恐怖に支配された者に、この男がどれだけ鮮やかに安堵感をもたらすことか。

アオイは子供に語りかけた。

「もう大丈夫」

心配ない。だって、イトがいる。

子供は、現れた大きな男を見上げた。

イトが子供の前にひざまづくと、何かに押されたかのようにその胸

元へと転がり込む。

イトはそれを受け止め、何か話しかけた。

ヨク、ガンバッタ。

アオイは、イトの唇がそう動いたのを見逃さなかった。

イトは子供を、自分のマントの中に包み込んだ。そして、立ち上がり、自分自身の姿をフードで隠しながら、踵を返した。

アオイは微笑んだ。

もう、大丈夫。

そこは、とても安全な場所だから。

そこにいれば、何も怖くない。

「もう…大丈夫」

子供の母親は、いつの間にか泣き止んでいた。
フラフラと歩いて、鏡の傍らに座り込む。

「ウスラヒ様」

震える声に名を呼ばれ、ウスラヒはアオイを見つめたまま頷いた。
アオイは、更に水鏡を覗き込んだ。

イトは、足早に來た道を戻って来る。胸元に、大事に大事に子供を抱きしめて。

「大丈夫。イトがちゃんと連れて戻って来るわ」
ここに戻ってくる。

不意に、急激な眠気がアオイを襲った。

イトが帰ってくるのを待ちたいのに。

もう、少し。

思うのに、まぶたが重い。

体が保っていられずに、床に崩れる。

「イト」

アオイは小さくその名を呼んだ。

そして、そのまま気を失うように眠りへと落ちた。

「そうかい」

ウスラヒは微笑んだ。

倒れたアオイを、優しく抱き起こし胸に抱く。

「ウスラヒ様…この方は…」

ツバクロが、妻の傍らに膝をついた。

ウスラヒは、ツバクロを見つめた。

「天使さ」

イトが何度も否定したそれを、いとも簡単に口にする。

「そうだろう？」

ツバクロは頷き、頭を垂れた。

セキランも、また、倣うように頭を下げる。

「そうかい…イトが見えたのかい」

眠る娘に尋ね、恭しくこめかみに唇を触れる。

「あんたは天使だ」

ウスラヒは微笑んだ。

それは美しい、そして、ひどく満足げな笑みだった。

第4日

昨日の雨が嘘のように晴れ渡った空だった。

今日も、アオイはその美しさに気が付くことができた。

それだけではない。

水分を多分に含んで、瑞々しさを増した木々の幹や葉。生きていることを謳歌するような、ひととき高々と響き渡る鳥のさえずり。

森の中のそこかしこに散りばめられた激しい雨の名残と、それを越えてなお力強く生きるものの存在をも気が付き、それらはアオイの心の奥深くに何かを訴えてくる。

ぬかるんで歩きにくい大地さえが苦痛ではない。

それは、キリンググシークに向かうことをどうという訳か嬉しく思えないアオイを励まし、歩き続ける力を与えてくれている。

だが、それらも目の前の男の様子を見ると、色を褪せてしまうのだ。今朝からイトがおかしい気がする。

何も言わない…元より饒舌な男ではないと思う。

視線を合わせようとしな…これは、昨日の昼間からか。

「イト」

夕刻を過ぎ、あたりが暗くなった頃。

ようやく一つの考えに至ったアオイは、野営の準備をする男のマントをツンと引っ張った。

イトは振り返り、フードを外した。

まだ、なんとかお互いの表情が見て取れる明るさがある中、大きな傷のある顔が、無言で見下ろしてくる。

「…怒ってるの？」

問う。

考えた。

どうやら今までは、微笑めば大抵のことは済ませることができていたようだ。

興味のある話もない話も。尋ねない疑問の答えも。

アオイが何を口にするとはなくとも、微笑めば対面する人間は何かと語りかけてきた。

だが、この男が相手ではそれは望めない。

アオイ自らが動かなければ。

だから、考えた。

こんな風に他人の心内を考えたことなどない。

一生懸命に考えて考えて、辿りついた答えを口にする。

「私、あの人達に見られてはいけなかったのね？」

イトは少し眉を寄せた。

それは、アオイの言葉が正解だったのか否なのか。

「ごめんなさい」

分らないが、謝る。

あの部屋から出るなど言われたのに出てしまつて。

あの人たちに姿を見せてしまつて。

「怒つてない」

少しの間をおいて、イトは答えた。

アオイのフードを外して、今日初めて視線を合わせてくれる。

一つしかないのに…その瞳は、アオイの二つの瞳を難なく捕えて離さない。

「少し考えてただけだ」

ホツとする。

自然に体から力が抜けた。

「良かった」

イトがアオイから視線を外す。

その態度に、言われた言葉を思い出し、己が無意識に浮かべていたらしい笑みを消した。

イトは、いららないと言つたのだった。

アオイの笑みをいらないと。

再び、イトが今夜の寢床の準備を始める。

アオイは邪魔しないように、少し離れたところでそれを眺めることしかできない。

微笑みさえも拒否されてしまった自分は…本当に何もできない。やがて、準備を終えたイトは、懷からサシヤを出し火を起こした。3日前と同じような光景だったが、火を点けた後の小さな獣の行動は全く違った。

サシヤは、アオイを見つけると小さく鳴いて、イトの足元をすり抜けた。

タタタつとアオイに駆け寄ると、ぴょんと跳ねて胸元へと飛び込んできたのだ。

驚きながらも温かい毛玉を受け止めてから、慌ててイトを見る。

イトはそれを呆れたように眺めて「…抱いてろ」
言つと火から少し離れて腰を下ろした。

サシヤを抱いたまま、アオイはイトの傍らに座った。

「…貴方は、使い魔なの？」

聞きたいことはたくさんあるように思えたが、何をどう疑問にすれば良いのか分からない。

だから、一番簡単な質問を口にしてみた。

膝にいるサシヤの頭を撫でながら「この子はいつもそこにいるの？」と、イトの胸を指す。

人に何かを問う時、皆、こんな不安を抱くのだろうか。

答えてくれるのか、という不安を。

「こいつはいつも一緒にいるな」

イトは、答えてくれる。

サシヤの顎下を、節のゴツゴツとした指先が撫でる。

それを嬉しそうにサシヤは受け入れ、もつと撫でてくれというようにアオイの膝上でごろりと腹を見せた。

「この子…姉様が連れていた子にとても似てるわ」

イトの大きな手のひらが、サシヤの腹を優しく撫でるのを見つめながら、思い出したことを口にする。

二つ年上の姉のサクラは、いつも小さな従者を連れていた。

サクラについて回るその存在は人懐こく、アオイにもよくじゃれついてきたものだ。サクラがいなくなってしまったのと共にあの子も姿を消したのだが、今、どこにいるのだろうか。

「軍神の妃？…あの妃、使い魔なのか」

イトが意外だというように、呟いた。

姉を知っているという口調に、アオイは身を乗り出した。

「姉様に会ったの？いつ？」

アオイがサクラに会ったのは、雪が降り積もる真冬のこと。アオイの17歳の誕生日のことだった。

たやすく会うこともままならない身分となってしまった姉は、それでも変わらない笑顔でアオイを抱きしめてくれた。

今度、会えるのは多分秋。

一番上の姉キキヨウの婚礼の時だろうと、誰かが言っていた。

「最後に会ったのは…1カ月くらい前か」

イトの答えに、単純な羨望を覚える。

アオイは、もう何か月もサクラに会っていない。キキヨウも優しいでも、サクラの側にいると感ずることができる春の日差しのような優しさは、他の誰にもないものだ。

時折、アオイは無性にサクラに会いたくなる時がある。

「お元気だった？…殿下は、なかなか姉様の里帰りをお許し下さらないんですって」

「…軍神の寵愛ぶりが知れるな」

イトの答えは耳に入らなかった。

だって。

「…貴方…笑うのね」

アオイはイトの笑顔を見つめながら、呟いていた。

いつも無然とした表情しか見せないから。

こんな風に、笑うのだ。片目を細め、唇の端を上げて。

「面白けりゃ、笑うだら」

そうなのだろう。

「あんたも笑ってるよ」

いつの間にか、消し去ることなどできなくなっていた微笑み。イトは視線を逸らさなかった。アオイを見ている。

「面白いもの」

言っと、イトはまた小さく笑った。

イトとの会話は楽しい。

だから、笑う。

これで、良いのだ。

これで。

「…今、私、とても楽しいわ」

だから、笑っている。

アオイが言っと、イトは笑みを深めた。

心臓が、トクンと跳ね上がる。

アオイはイトの衣を握った。

男が許すのは、これだけか？

問えば、答えてくれるように。

アオイが求めれば、もう少し与えてくれるのだろうか。

アオイは自身が望むまま、イトの胸へと滑り込んだ。

「…おい」

聞き慣れた呆れた声。

だが、それ以上何も言わなかった。アオイの背中に腕が回されて、ただ抱いてくれる。

サシャがイトとアオイの間で満足げに丸くなって目を閉じた。

アオイもまた、まぶたを伏せた。

何かがアオイの中で、変わりつつある。

まだ、それははっきりと形をなしてはいないけれど。

でも、確実に少しずつ。

第5日

胸がざわつく。

どうして？

これは何？

これは、不安というもの。

少し前なら、意識することのなかったもの。

なのに、今は。

不安、不安、不安。

それ一色の世界。

アオイは飛び起きた。

降り注ぐのは朝日。明るい、何一つ蔭りのない世界。

周りを見回す。

ここがどこでもいい。

今がいつでも構わない。

ただ一つ、男がいない。

それだけ。

それだけで、指先が冷たくなってくるようだ。

寒い筈もないのに、体を覆うように掛けられている布地を引き寄せ
る。

大きなグレーのマントはいない男のもの。

これがここにあるということ、戻ってくるということなのだろう。
名を呼ぼうとして、少しだけ待ってみる。その間にも、不安がじわ
じわと大きくなっていく。

だめ。

無理。

耐えられない。

どうして、あの男がいないだけで、こんなに不安になるのだろう。

「イト？」

小さな声は、どこにいる男にも届く筈がない。

だが、思いがけなく返事があった。

「チッ」というそれは、ひょっこりとマントの中から顔を出した。

サシャ。イトの遣い魔。

胸元へと寄つてくる体を撫でれば少しは気持ちも落ち着くが、それでも渦巻くものは消え失せはしない。

「イトはどこにいるのかしら」

サシャに言うともなく呟くと、思いのほか良い反応が返ってきた。

ぴよんとアオイの胸元から飛び跳ねて大地へと足をついたサシャは、アオイを呼ぶように再度小さく鳴いた。

「サシャ？」

イトのマントを抱きしめたまま、寝起きで重い体を、魔獣に促されるようになんとか立ち上がる。サシャは、途端に勢いよく走り出した。

「え、サシャ!？」

走り出した小さな子を追う。

サシャは、アオイを導くかのように、時折スピードを緩めたり、立ち止まったりしながら迷いなく進んでいく。

とは言え、アオイの足元は覚束ない。しかも、アオイの体の大きさまでを気にかけてくれる筈もないサシャは、背の低い木々や草花が生い茂る中をちよろちよろと器用に走っていく。

結果、アオイは葉に塗れながら走る羽目になった。

そして。

「イト!」

視界が開けると同時に、見つけた男の名を呼ぶ。

呼んだは良かったが、そのまま固まる。

なぜなら。

まるで、自分とは別の生き物のような裸体が、そこにあったからだ。肌の色の違いはもちろんだが、それは些細な違いに過ぎない。

幾度と寄せた体が、自身より大きいことも分かっていた。

だが、これほど違うものなのか。

広い肩、厚い胸、それから太い腕。

アオイの知る自分自身の体が、どこもかしこもなだらかで柔らかい線を描いているのに対し、男の体は時に一筋に鋭く、時に複雑な流線で、その身を作り上げていた。

そして、その体の至る場所には、顔にあるのと同じような傷跡が無数と思えるほどに刻まれている。

なんて。

素直な感嘆を抱きながら、それをどう表現すれば良いのか。

荒々しく。

痛ましく。

そして、美しい？

「…おい」

イトが水浴びをしている、という事実に気がついたのは、いつもの呆れたような声をかけられてからだだった。

「ごめんなさい」

慌てて、イトに背を向ける。

顔が熱くなり、鼓動が早まる。

「別に、俺は見られても構わねえけど」

水音がする。

「あんたは見ても楽しくないだろう？」

隣に気配を感じて視線を向けると、布地を羽織っただけのイトがいる。

濡れたままの体を気にすることなく、衣装を身に付けていく男を見ていられる筈もなくて、視線を逸らした。

やがて、着替えを終えたイトは、アオイの手元にいるサシャの額を指で弾き「もう少しまともな道案内をしろ」と呟いた。

サシャは不満げにプイツとイトから顔を背け、アオイの胸元に丸まる。

イトは肩を竦め、アオイを見下ろした。

不意に指先が、頭に触れる。

「こいつに、連れまわされたな」

言いながら見せた指先には、小さな葉っぱ。

「あんまり寝起きは良くないみたいだったから、大丈夫かと思ったんだが…」

葉が指から離れて落ちる。

「置き去りにして悪かったな」

謝られるとは思わなかった。

アオイはびっくりして、イトを見上げた。

イトは、再び手を上げてアオイの髪についているらしい葉や小枝を取り除いていく。

世話を人に任せることには慣れている。

しかし、どうしてか、今はとても恥ずかしい。イトの顔を見ていることはできなくて、俯きつつ視線を湖へと流した。

先程まで、イトが水浴びをしていた場所は朝日を受けて光を弾いている。残像のように浮かぶそれを振り払いつつ、キラキラと揺れる水面を見ていると、アオイの中にウスラヒの元での不思議な体験が甦る。

「イト」

湖を見つめながら、名を呼ぶ。

「私、イトを見たわ」

あれは、何だったのだろう。

「ウスラヒに言われて…鏡を見たの。あれは…」

イトの手が止まる。

湖からイトへ視線を戻せば、目の前の男はじっと森を見ている。

昨日、歩きながら見せた顔とも、また少し違う。

あの時、イトは怒っているのではないと、考えているのだと言った。

今の顔は？

今のイトの感情は何？

「…イト？」

アオイは、イトの衣を引いた。

「忘れる」ポツリと言う。

「忘れる？あの鏡のことを？」

尋ねると、イトはアオイに背を向けた。

一瞬拒否されたのかと思った。

だが、そうではなかった。

「忘れる。鏡も、ウスラヒも」

それに答える言葉を見つけれないアオイに代わるように、森の中から声が聞こえた。

「……いいえ、忘れられては困ります」

イトから小さな舌打ちが零れた。

現れたのは4人。

1人の男は剣を鞘に納めたまま、イトに深く一礼した。初老に差し掛かった、だが動きにはまるで隙がない男は紛れもない戦士。その男の左右に、イトよりいくつかな若そうな男が2人。静かな中央の人物に対するかのように、剣呑な空気を漂わせつつ剣を構える。そして、残る一人は、まだ10歳になるかならぬかに見える子供だった。小さな体には不似合いにも思える剣を、教えられたとおりの型で構えている。

恥じるところはないとばかりに、朝日の下、晒す4人の姿は、イトと同じ血を現していた。

「剣を納めさせる」

イトは男に命じた。

アオイがイトの衣に、指先で皺を刻む。

ちらりと見やれば、その澄み切った緑の瞳は子供に向けられた。自分よりも小さな子供が、イトに向かって剣を構えるのを呆然と見ている。

一度として戦に赴いたことのない貴族の娘にしてみれば、驚くべき

光景なのだろう。

いたいけな…と人々が思う子供でさえも、グレンダである以上、人に剣を向けることを宿命付けられる。

グレンダが忌み嫌われた理由がここにもあった。

「その娘、我々に頂きたい」

中央の男が、イトに語りかけた。

深い、こんな状況でなければさぞかし心地よいだろうと思わせる声だった。

「随分と鼻が利くな」

イトは自らは剣に手をかけることもなく、静かに返した。

「ウスラヒ様の命ではありません…あの方は貴方を支持しておられる」

ウスラヒの…いや、水鏡の信奉者は、この行動が自らの意思であると告げた。

「イトヨウ様」

そして、イトの真の名に敬称を掲げて呼ぶのか。

「貴方はグレンダを去られた身。水鏡の操り手は不要でございました」

確かに、グレンダを捨てたのはイト。

だが、それはグレンダの消滅を意味している。

「グレンダはもうない。水鏡もいずれ消える」

それを分からね残党は、こうして、いまだ彷徨い続けているのか。子供の持つ剣先が、僅かに揺れる。

「貴方は良い。そのように、お一人で生きていける」

男は言いながら剣を抜いた。倣うように、若者と子供が剣を構え直す。

「しかし、同胞の中には…頼るものがなければ生きていけぬ者もおります」

何かの合図があったように、剣の一つがイトへと突き出された。

アオイを背後に庇いながら、それをかわし、しかし自身は剣を抜か

ない。

「どれだけの連中が、この娘を知っている？」

男に尋ねた。

答えはない。

避けた剣が、再度、イトに振るわれる。

イトは、男の腕を捕らえて、その動きを止めた。

若い男は憎悪さえ感じる激しい視線で、イトを見上げた。

見知った顔だ。名前は…なんだっただろうか。覚えていない。

イトは、男の腕を捻り上げ、己に向けられていた剣を奪った。

一瞬の迷いもなく、それを男の首へと振り落とす。

背後で、アオイの握る衣が大きく揺れたのを感じた。

足元に、倒れこむ体。それから離れることを余儀なくされた頭が、
転がり遠ざかる。

死に際の恐怖に引き攣っているであろう表情が見えないことに安堵
したのは、己ではなくアオイを思ってた。

「今なら…見逃してやる」

この者達は、アオイに危害を加える者ではない。

いや、この先のアオイの人生においては、もしかすると途方もなく
障害となる者達かもしれない。

それでも、できれば、命までは奪いたくない。

それでは、グレンダを滅ぼす旗手となった意味がない。

だが、イトの言葉は届かなかった。

もう1人の若い男が、剣を振り上げながら向かってくる。

イトは血を滴らせた剣で、それを受けた。

衝撃に血が弾かれて、イトに降りかかる。

「引けません」

反対側から、語る男の剣が突き出されるのを、その腕を掴んで捕え
る。イトを振り払おうとするのを、強く引き寄せて目の前の男の胸
へと導いた。

同胞の剣に背までを貫かれた二人目の犠牲者は、呻きとも悲鳴とも

とれる声を漏らして膝をついた。イトに向けられていた剣は、僅かにイトを掠ることもなく大地に転がる。

ドサリという音が、人が骸と化したことを知らせる。

イトの眼は、既にその男を見ていない。イトが見ていたのは、唯一名を知る男。

同胞の胸に剣を奪われた男は、静かな瞳でイトを見つめていた。

この男の名は知っている。

だが、もう必要ない。

なぜなら、呼ぶことは二度とないから。

自由を得た剣で、イトはその男の首筋を切り裂いた。

鮮血が舞い上がる。

全て、一瞬の出来事。ほんの一瞬で、静かで穏やかだった森に地獄が出現した。

「…相変わらず…お強い」

初老の男は消えそうな、そしてどこか恍惚とした声で呟いた。

仰向けに倒れた男を見下ろし、イトはもう一度尋ねた。

「他に娘を知る奴は？」

男は今度は答えた。

「おりません…少なくとも私は誰にも」

頷きながら、イトは最後の一人に視線を向けた。

「あんたの孫か？」

答えはなかった。

イトも期待はしていなかった。

最後の一人。子供は、ガクガクと震えながら、既に構えてさえいられない剣に、しがみつくようにしてなんとか立っている。

イトは剣の血を払い、子供へと踏み出した。

「イト！」

アオイが背中にしがみつく。

振り返けなかった。

どんな瞳で、自分を見ているか知りたくなかった。

「あの子を…？」

その先の忌まわしい言葉を綴ることはできないようだった。

「イト」

何を願うのか。

天使は、殺戮者に何を諭すのか。

「イト」

アオイはただイトにしがみついて、縋るだけだった。

イトは、子供を見つめた。

ほんの1日前、この子供と同じ年頃の子を救った。今は、その命を絶つのか。

「…人を斬ったことがあるか？」

尋ねた。

子供は首を横に振る。

「獣を斬ったことは？」

同じ返事。

イトは、今しがた散った命の傍らに跪いた。

そして、横たわる遺体に剣を向ける。

「イト？」

イトは、3つの遺体の耳を裂いた。まだ、そこからは真新しい血が滴り出る。

「…グレンダは生まれてすぐに耳に証を埋め込む…知っているか？」

子供は三度、首を振った。

グレンダの容姿を持つ子供。だが、人を殺めたことも、獣を狩ったことも、失われた者の送り方も知らないと答える。

それは、何を意味しているのだろうか。

イトの手が血の中から拾い上げたのは、紫の石が埋め込まれた金細工だった。

「まともな死に方なんてできねえから…死んだことだけが待つ者に知れば良い」

イトは剣を置いて、子供に近付いた。身を強張らせる子に「手を出

せ」と命じる。

剣から離れた小さな手のひらの上に、まだ温もりの残るそれらを乗せた。3つの耳飾は、すべて形が違っている。見る者が見れば、これらの主が分かる筈だった。

「お前の耳はきれいなままだな」

子供の耳には、飾りどころか傷一つなかった。

それが、誰かの望みだったのだと思いたい。

遺言代わりの宝石などいらない生き方を誰かが望んだと。

「…貴方は…ないのですね」

子供の応答にイトは眉を上げた。

青ざめて震えながら、必死に隻眼を捕える。

気丈な…それは、女兒であることに、イトは気がついた。

「俺には知るべき者がいないからな」

イトの耳には、自身でちぎり取った傷痕があるのみ。

子供は、じつとイトを見つめた。

綺麗な紫の瞳。

あるのは怒りと怯え。

慣れた視線だ。こんな視線に晒されて生きているのだ。

イトは空を見上げ、甲高い指笛を鳴らした。

すぐに、青空の中に黒点が現れる。

「あの鳥が分かるか？」

子供が頷くのを確認して、続ける。

「あれがウスラヒのところにある」

はつとしたように、鳥からイトへと視線が戻った。

「…殺さないのですか？」

殺すべきかもしれない。

その方が、この子供も楽かもしれない。

「どうして？」

どうして。

理由が必要か。

「天使が…殺すなど言う」

否定し続ける存在。

だが、今はそれが相応しい気がする。

「生きる」

どんな未来をもたらずか、今は知る術をもたない天使が、そう望むから。

子供は、アオイを見つめた。

やがて、何か納得したように立ち上がった。

「あれは祖父と叔父です…私は貴方に復讐するかもしれませんが」
イトは頷いた。

今は、それが生きる理由で良い。

「俺を殺したい連中は幾らでもいる。誰かにやられる前に来い」
生きていれば、その意味も理由も変わる。

今は、イトへの憎悪と復讐心で生きながらえればいい。

イトが指を鳴らすと、旋回していた鳥が動き始める。

子供は剣を鞘にしまい、それを追って走り出した。

茂みの中に紛れる背中を見送り、イトは転がる遺体に視線を移した。
見たいものではない。今更、心が痛んだりはしないが、これらに自らの功績を感じることもない。

それでも、そこに視線を置いたのは、アオイを見ないためだ。

真つすぐにイトを見ていた瞳は、変わっただろうか。

嫌悪、非難、侮蔑、そして恐怖。

あの鮮やかな緑は、そこに何を浮かべているだろうか。

「イト」

名を呼ぶ声に変わりはないように聞こえる。

だが、アオイを見ることはできない。

イトは、いつの間にかアオイの手から滑り落ちていたマントを拾い上げた。

座り込むアオイの横をすり抜けて湖へ近付くと、顔と手のみ血を清らかな水で落とす。衣類に飛び散った血痕は、足搔くだけ無駄だか

ら、マントで覆い隠す。

これが、本当の姿なのだ。

血に塗れた殺戮者。

「イト」

アオイが、また、名を呼ぶ。

その声は、少し震えているようだ。

「ごめんなさい」

意味の分らない詫びに振り返る。

「立てないの」

イトは少し迷い、結局アオイに近付いた。深くフードを被り、完全に己を隠して。

「…ごめんなさい」

小さな体が小刻みに震えている。

イトはアオイを抱き上げようと、ひざまずいた。

と、イトが触れるより先に、アオイの震える腕が伸ばされる。

夢にうなされたあの時のように、イトの首に縋り付く。

その動きにフードが外れ、イトはアオイと視線を合わせた。

息が触れ合うほど近く、アオイはまっすぐにイトを見つめていた。

今にも零れそうな涙を浮かべる瞳には、イトが予想した何一つとしない。

変わらない澄んだ緑が、イトには理解できない絶対の信頼を湛えている。

「イト」

細い体は、迷いなくイトへと預けられる。

なぜ。

どうして。

こんなに、まっすぐになれるのか。

不意に突き上げた衝動を、渾身の理性と罪悪感で押しとどめた。

この娘は天使。

否定するそれを、あえて肯定することで、自らを戒める。

許される筈がない。

この信頼も。

抱く体の温かさも。

全て、刹那のもの。

あと一つか二つ…朝と夜を越えれば、全て消え失せる。

イトはアオイを抱きあげた。

最初の日には羽の存在を疑うほど軽かった筈の体が、生々しい存在感を誇示していることに気がつきながら、イトはキリンググシークへと歩みを進めた。

5日目と6日目の境目

夕暮れ時になって森を抜けた。

さすがに疲れ切った様子を見せるアオイを、森の中で休ませるのは限界だろう。

温かい食べ物。柔らかなベッド。

彼女に必要なのは、そういった極々当たり前の日常的なものだ。町に入り、場末の宿を目指す。

アオイには、深く深くフードを被せたが、それでも間近に近づけば並外れた美貌は隠しおおせるものではない。

薄暗い中でも、すれ違う者達の視線は驚きに見開かれ、確認するかのように振り返る。

もし、探している者がいるならば。

それがどちら側の人間であろうとも。

イト自身の目立つ姿とあわせて考えれば、見つかるのは時間の問題だ。

今、この時にも、人の口から口へと伝わっているに違いない。

隻眼のグレンダが、天使を連れている、と。

だが、明後日にはキリングシックに到着できる。

そうすれば。

この娘さえ、軍神に届ければ。

イトの何もかもが、元に戻る筈だ。

ただ、魔獣を狩るだけの日々。戦士であることでしか生きられない

…何よりもグレンダを引きずっているイトヨウの日々が戻ってくる。

この娘もそうだろう。

ようやくのように宿で一瞬の休息が許されたアオイは、椅子に座り、果てたように宙を見つめている。

今は僅かにも笑みのないこの娘も、天使のように微笑む日々に戻るのだろう。

「水鏡というのは何？」

ポツリと言葉が落ちた。

人形のように座る姿に変わりはない。

背筋を伸ばし前を見据える姿は、可憐で凜としていて。

上等ではない衣を身につけているにも関わらず、紛れもなく誇り高い令嬢。

イトとは無縁の筈の人種だった。

「忘れろ」

イトは昼間と同じ答えを口にする。

それ以外の答えはない。

アオイはイトへと視線を向けた。

「忘れた方が良いの？」

尋ねてくる。

少し前、言葉を見失って何も問うことのなかったのはこの娘の筈。

今は、迷わず問いかけてくる。

そして、イトは答える。

「忘れた方が良い。この何日かは、あんたにとってロクなもんじゃなかっただろう。全部、忘れてしまえ」

アオイは立ち上がった。

イトの真正面に立ち、見上げてくる。

「無理だわ」

きつぱりと言い切った。

少し意外に思う。

この娘は、こんな風に自らの言葉を語る者だったか？

「じゃあ、忘れた振りをしろ」

イトは疑問を押しやり、そう告げた。

「皆があんたにそう望むさ…望みに応えるのは得意だろう？」

アオイは首を振る。

「…それが例え貴方の望みでも…無理」

白い指がイトの衣を握る。

既に湯浴みし、衣も着替えた。

今朝方、3人の血を浴びた痕跡はない。

それでも、血の生温かさの残骸が、イトを駆り立てるようだった。今は、アオイに触れられなくなかった。

「忘れることなんて…できない」

そう言いながら、寄せられるアオイの体もまた湯浴みを終えている。伝わる体温。

くすぐる香り。

これは誘惑なのか？

浮かぶ考えに、あり得ないと打ち消しながら。

本当にありえないかと問い掛ける。

天使ではない。

これは女。

寄り添う体の腰を抱く。

手のひらに、柔らかな肉感。

ぐっと引き寄せて、初めて、イトからの接近を試みる。

逆らう意志は、微塵も見られなかった。

抱き寄せて、抱き上げて、安いベッドへと横たえる。

体を重ねれば、求めるように首へと腕が回された。

アオイの様子に気がつけたのは、まだ、イトの方にも迷いがあったからだろうか。

触れる指先に震える肌。

唇から漏れる声を、戸惑うように噛み締め。

イトを抱く腕は、ただただ縋るばかり。

どれも、これも。

まるで、物慣れない少女の様だった。

まさか？

やはり？

「…あの男は…あんたに何もなかったのか？」

その意味さえ良く分からないというように。

アオイは揺れるだけの瞳で、イトを見つめた。

それが、疑いを確信へと変えた。

「そうなんだな」

ウスラヒ。

イトはここにいない女の名を、声なく呼んだ。
罵るために。

ウスラヒ、あんたはやはり悪魔かもしれない。

「イト？」

イトはアオイから、離れようと身を起こしかけ。

「いや」

それを、拙い腕が止める。

この腕は、庇護を求めるだけのもの。

ならば、イトがすべきことは。

この何日かで覚えた欲望と無縁な抱擁でアオイを受け止めた。

「…寝てしまえ」

これも、もう言いなれた言葉。

アオイは、イトの胸に身を寄せた。

男の情事を途中で止めたということに、何ら不安も不満も感じさせない無防備な動作だった。

「貴方がそう言うなら…眠ることはできるの」

そう言って、瞳を伏せる。

長いまつげに僅かな震え。

目尻に僅かな滴を見つける。

イトは、それから目を逸らした。

天使。

悪魔。

神。

この世には、いない。

だが、そう呼ばれるに相応しい存在はいるのかもしれない。

「でも…忘れるのは無理だわ」

イトはそれに応えなかった。

寝てしまいたいのはイトの方だった。

忘れてしまいたいのも。

だから、応えないまま隻眼を閉じた。

この娘を拾った時は厄介事を抱え込んだと、そう思ったただけだった。今は、それとはまったく違うものが、息苦しさを感じる程の重さでのしかかっている。

思い出すのは、昨夜のウスラヒとのやりとり。

子供を連れて戻ったイトは、ツバクロとセキランがいる部屋のソファに眠るアオイを見て、嫌な胸騒ぎを覚えた。

子供の無事を喜ぶかつての仲間を送り出す間際、「ツバクロ、あの娘は…」言いかけた言葉は「分かっている」の一言で遮られた。

あの二人が、イトの不利益になりかねないことを、軽々しく口にしてないだろうことは承知している。むしろ、イトが恐れいているのは彼らを巻き込むことこそだ。

もう、同胞ではないのだ。

小さな子供が剣を振るう真似をしたという些細なことにさえ気をはらい、必死にその地の者になろうとしている彼らにとって、イトとの関わりは何一つ良いことなどないだろう。

「ウスラヒ…何故、あいつらに娘を見せた？」

言わずとも分かっている筈だ。

イトに森を行けと予言した女は、イトが知ろうとしない事の全てをも知っていると思ったのは間違いだったのだろうか。

ウスラヒは、それについては何も言わなかった。

理由も言い訳も、いくらでもありそうなのに。

「イトヨウ」

ウスラヒが口にしたのは、イトの真の名だった。

それは、この女がグレンダの残党としての、イトヨウに話しをしよ

うとしている証に違いない。

イトはそれを拒否するように背を向け、アオイに近付いた。

「その娘、あたしにちょうだいな」

いきなりの申し出に、イトは思わず振り返ってウスラヒを見た。

ウスラヒは、ちらりとも笑みのない真剣な貌で「アオイ・オードルを知っていたのはね、水鏡が求めたからだよ」

それが切り札であるかのように口にした。

水鏡。

イトは、ウスラヒの足元にあるグレンダの神器から、あえて視線を逸らし続けた。

「水鏡に跡目を尋ねるとね…必ずその娘を映し出す」

イトは感情を一切消し去った声でそれに答えた。

「操り手の跡目はいない」

水鏡は、グレンダが一族として保有する唯一の形あるものだった。

水鏡を護り、水鏡によって護られ、グレンダは存在を証明してきたのだ。

だが、水鏡の存在は同時にグレンダを陰の集団となすものでもあった。

人は見えないものを見る者を、知らない筈のことを知る者を畏怖せずにはいられない。人々は水鏡とその操り手を崇め奉り、時に継りつきながらも忌み嫌う。

それを核として存在するグレンダも、また同じとみなされた。

「操り手はあんたが最後だ」

グレンダがなくなったその時に、水鏡も失われるべきだったのかもしれない。

グレンダの一族を解放という名の滅びに導いたイトヨウは、その場で水鏡も破壊すべきだったのかもしれない。

だが、イトヨウは水鏡を見逃したのだ。

「新たな操り手はいない。そうだったな？」

ウスラヒがそう告げたから。

最後の操り手が消えれば、水鏡は何も映し出さなくなる、とだから。

それまでは。
ひっそりと。

存在は神話に限りなく近くなりながら、それでも事実としてそこにあったのだ。

イトの言葉にウスラヒは頷かなかった。

「第一、この娘は軍神の義妹だ。そんなことは、あんただって知ってるだろう？」

ウスラヒはイトから目を逸らした。

イトはウスラヒを見つめ続けた。

何故、今になって。跡目を欲しがるのだ？

かつて、残酷なまでの潔さで、一族の終焉を告げた女が何故？

「帝国に帰ってどうするんだい？」

ウスラヒは呟いた。

「堕ちた天使の行く末なんぞ、たかが知れているだろう」

『堕ちた天使』というその響きにイトは眉を寄せる。

「今更、イルドナス王の元に輿入れする訳にもいかないだろう。男に攫われて。幾夜も越した娘だよ」

イトの知らないことを。知らなくても良いことをウスラヒが告げる。だが、イトはそれを聞き流した。

イトには関係のない話だ。

「ウスラヒ。俺は命じられたとおり、キリングシークにこの娘を連れていく。それだけだ」

告げるとウスラヒは大きなため息をついた。

「あんたが。その娘を拾うとは。ついてなかったね」

その言葉が、引っかけた。

天使を手に入れたかったのは、攫った男には違いない。だが。

「ウスラヒ」

名を呼べば、ウスラヒはいつもの謎めいた笑みを浮かべた。

「あんたか？」

水鏡はグレンダを護るもの。そして、グレンダは水鏡を護り、継ぐ者。

水鏡の求める操り手を手に入れるのも、グレンダの役割の一つだった。

そして、水鏡の求める操り手は、グレンダの一族とは限らなかった。グレンダは、過去に幾人もの操り手を他部族から受け入れてきたのだ。

それは、ある時は政略であり…そして、ある時は

「あんたが、この娘を…」

攫わせたのか。

過去には奪略してでも、手に入れた操り手。

それは昔話ではなかったのか。

「…あたしはちよつと囁いただけだよ」

肯定とも取れる言葉に、イトは声を荒げずにはいらなかった。

「ウスラヒ！」

もう、グレンダは必要ない。

時がそう告げている。

戦でのみ生きること許される、兵の一族は滅びの時を迎えている。

そして、水鏡もいずれなくなる。

この世は、予言者ではなく…現人神を求めるのだ。

未来を見る者ではなく、未来を見せる者が、この世を統べる。

そう予言したのは、この女ではないか。

なのに。

何故。

「…イトヨウ…流れが変わったんだよ」

ウスラヒが言う。

予言者の不吉な言葉は、もう聞き慣れている。だから、心に響かない。

「何かが起ころうとしているんだ」

イトはウスラヒを睨む視線を緩めない。

例え、そうだとしても。

死ななくて良い男が一人死んだ。

何不自由なく過ぎ、大国の妃として華やかに生きていく筈の娘がその未来を奪われた。

「水鏡が必要な時が来るかもしれない…だけど、あたしは…そう長くはない」

感情露わに縋るウスラヒから目を逸らし、イトはアオイを見下ろした。

『堕ちた天使』と呼ばれた娘は、それでも穢れ一つない姿で穏やかな眠りに就いている。

「あたしは…水鏡の操り手が欲しい！…あたしの跡目が欲しいんだよ」

天使ではない、と言ったのはイト自身。

だが、誰もが天使と呼ぶ娘を貶めたのは…グレンダの亡霊なのか。

「その娘…水鏡を操ったよ。だから、あたしにおくれ」

「諦める」

イトは無情に告げた。

「…イトヨウ」

ウスラヒの声に落胆が込められる。

「この娘はキングシークの貴族だ…明るい場所でかしづかれて生きてく人種だ」

こんな日の当らぬ場所で、女神だ悪魔だと囁かれるのは似合わない。

華やかな場所で、天使と崇められているのが相応しい。

「運命だとあんたが言った」

運命なんて言葉は嫌いだ。

だが、この女はそう言った。

「水鏡が消えるなら、それも仕方ない…そうだろう？」

未来など見えなくても良い。過去など知らなくても良い。

それでも現在は動いて行くのだ。

「そうだね…そうなんだろうね」

ウスラヒは足元にある水鏡に目を向ける。

ウスラヒの視線に應えるように、水鏡の表面がユラユラと揺れ始め、やがてそれはバシヤンと激しく跳ねて、床に水を広げた。

「だけど、足搔かずにはいられなかったんだよ…」

イトは剣を抜いた。

ウスラヒに刃先を向ける。

「この娘に害をなす者があれば、排除しろと命じられている」

ウスラヒは怯むことなく、それを見つめた。

そして、微笑んだ。

「…イトヨウ…その娘をあんたが拾った時から、あたしはもう何もする気はないよ」

イトはしばらくウスラヒを眺め、やがて剣を納めた。

ぐつぐつと眠るアオイを見下ろして…厄介事が、自らの罪にすり替わった瞬間を味わう。

「…あんたは…あたしが仕えるグレンダの頭領だ。あんたの命に…あたしは従うよ」

グレンダの頭領などという地位は既に過去のものの。

だが、今はそれを口にはしなかった。

それを口にすることは、罪から逃げる言い訳にしか思えなかった。

イトの思考を途切れさせる気配が動く。

ゆっくりと身を起こし、枕元の剣を手を取った。

ここは、かなりキングシックに近い。だから、いくらかはマシかと思っただが、甘かったらしい。

イトの動きに、アオイが身じろぐ。イトは、目覚めかけた娘の口を手で押さえた。

「静かに…シーツに隠れてろ」

囁きで命じると、闇の中で娘はコクリと頷いた。

イトはベッドから降りる。

何人だ？

探る。

一人、二人…五人まで、数えて止める。何人でも同じだ。今日はいつたい何人の命を奪うのだろう。

まるで、過去に戻ったようではないか。

一つ、違うのは。

あの頃、殺すのは生きる糧だった。

今は、護るために。

剣を振るう。

そこに、どれほどの違いがあるかなんて、分からないけれど。

どれくらいの時間が経ったのか。

激しい物音。悲鳴。呻き。

アオイは、言われた通り、頭までシーツに隠し、ただ待った。息を潜めて、身を縮めて。

その間、願っていたのは、イトの無事だけだった。

やがて、静けさが戻る。

さらにいくらか待って、アオイはそつとシーツから顔を出した。

「…っ」

悲鳴は声にならなかった。

目の前は、悪夢。

屍、死体、骸。

血、肉、骨。

そして、そこに立つ男。

それだけが、アオイにとっての救い。

「…ト」

声が出ない。

イト。

イト！

声にはならないけど。

何度も心でそれと呼ぶ。

それだけが、今この狂気の世界の、確かなものだから。

呼ばれた気がする。

視線を向ければ、真つ青な顔の娘がイトを見ている。

震える手がそれでもイトを求めて伸ばされる。

歩きかけて。

現れた気配に、問答無用と剣を振り上げる。

相手はそれを、抜かない剣の鞘で受けとめた。

「イト！」

聞き覚えのある声だ。

イトは、すつと剣を引いた。

「お前：相変わらず容赦がないなあ」

感心したような、呆れたような声。

外したフードからは貴公子然とした、端正な顔が現れる。

「…あんたが来たってことは…俺はお役御免か？」

天使の引き取り手としては、十分な存在だった。

漆黒の軍神の側近シキ・スタートン。

幾度と共に魔獣を狩った男を、貴族という毛嫌いしがちな身分を超

えて、イトは信賴している。

この男ならば、何の疑いもなくイトはアオイを手渡すだろう。

だが、シキは首を振った。

「いや、確認に来ただけなんだが」

のんびり答えながら、周りを見回す。

遺体の中に立っているとは思えない、呑気な動作だった。

「見事だな」

相変わらず緊張感のない男だ。

シキは、イトとは対を成すかのような傷一つない面に、女子供に受けの良さそうな柔らかな笑みを浮かべながら「とりあえず、行った方が良いんじゃないか？」

そう言つて、ベッドの上の娘を指し示す。

アオイは血の気のない顔で、シーツにくるまるようにしてイトを見つめている。

イトは遺体を無造作に避けて、アオイに歩み寄った。

声をかけるまでもなく、届く位置に辿りつくと同時にアオイの体はイトの胸へと崩れ落ちた。

ちらりと背後の男を見やれば、アオイの行動に驚いた風でもなく、そこが庭の一角でもあるかのような穏やかさでのんびりと近付いてきた。

シキはイトの横に立ち、イトの胸元で震えるアオイを見下ろし、そして、視線をイトに戻した。

「森で、グレンダの残党らしき遺体が3つ転がってた。あれ、お前だろうか？」

いきなりの問いかけだった。

アオイはイトの腕の中でピクリとも反応しなかった。

「知らねえよ」

答える。

シキの穏やかな視線は変わらない。

だが、この男が見た目そのままの呑気な貴公子でないことを、イトは熟知している。

「…傷跡は、お互いの剣のものだった。お前のその馬鹿でかい剣の痕じゃない。一見、仲間割れの同志討ち…けど、お前だろ？」

イトは屈んでいるために見下ろされている。

それが、気に入らなくて、アオイを抱きあげた。

「なぜ、そうなる？」

ほぼ真正面から、尋ねる男の視線を受け入れた。

「俺は…お前の腕を知ってる」

ありがたくない確信の得方だ。

黙っていると、シキはここに來た理由を告げた。

「…何が起きてる？その天使絡み以外で何かもめてるのか？」

イトの腕にいる娘をこの男も天使と呼ぶ。

腕にある温もりと重さを実感しながら、だが、今はその呼び名を否定しない。

代わりに告げたのは。

「もし、ここでこの娘を引き取ってくれるなら、その方が良い」

初めて腕の中でアオイが反応した。

ピクリと体が揺れて、イトの衣を握る手のひらに力がこもる。

「それじゃ返事になってないんだが」

シキの視線がアオイの手に注がれているのを知りながら、それを男がどう思ったかは考えない。

そして、シキの問いへの明確な答えを口にした。

偽りと知れるだろうと思いつながら。

「…グレンダの遺体のことは知らねえ…そいつらは、あんたの方が知ってるんだろ」

シキは足元に転がる遺体に目を向けた。

そこには何の感傷もない。

この男もまた戦場で生きてきた者だから。

これも日常の一つに過ぎない。

「お前みたいな裏道を知り尽くしたのが連れていても、数日がかぎつけらるほど目立つ天使を、いくら優秀とはいえ一騎士がどうやって10日も連れて歩けたんだろうな？」

こんなことを口にする時でも、この騎士はのんびりとした口調を変えないのだ。

探り合う会話は得意ではない。

「…何が言いたい？」

イトは先を促した。

「誰かが手引きした、とか。敵の先を先を読んで…どこかに天使を呼び寄せようとしていた、とか？」

シキの目が天井を見上げる。

「そんなことをできる人間に心当たりはあるんだが…理由がなあ…」
視線がイトに戻ってくる。

「と、うちの片割れが」

にやりと笑う。

シキの片割れ。

あの優秀な策士か。

「…あんたの片割れは…相変わらず穿ったものの見方が得意だな」
つい、苦笑いが零れた。

どんなにイトが黙秘しようと、知れる時には、知れる者には、やはり知れるのだ。

「イト？」

それでも、全てを話すことはできない。

いずれ、知れたとしても。

今は、アオイには何も知らさないまま、キリングシックに戻したい。

「何もねえよ」

だから、答える。

「明日、キリングシックに到着する。それで終わりだ」

そう、それで全て元に戻ったような振りをすれば良い。

「まあ、いいか」

シキが納得した訳ではないのは、分かっている。

だが、それ以上尋ねてこないのが、この男だ。

「今日ここに來たのは俺の独断だし…森の遺体はタキには内緒にし
てあるし」

視線でその方が良いだろう？と尋ねてくる。

何も答えないことを答えと受け取ったらしい男は、視線をイトの胸元に移した。

「私を覚えてますか？」

女子供に極めて受けが良いだろう笑みでの問いかけ。

アオイは、小さく頷いた。

怯えるように…顔見知りの騎士の何に怯えるのか、イトの胸元になお身を寄せる。

そして、僅かにも笑わなかった。

シキは気分を害した風もなく、「…もう少し、この男と一緒頂きますよ」

優しい口調で語る。

アオイは、もう一度頷いた。

イトはアオイを抱いたまま、シキに背を向けかけて。

「ここの後始末は頼んだ」

一言言い捨てる。

シキはあたりを見回して、眉を寄せた。

「軽く、面倒を押し付けてくれるなあ…」

そうは言いつつ、行けとばかりに手を振ってみせた。

「まあ…了解。気をつけてな」

どこまで、気がついたのか。

何を、気がついたのか。

にっこりと笑う男の心中は分からない。

第6日

夜が明けるには、もう少し時間が必要なようだった。

いくらの明かりもない道を、イトの足は迷いなく進んでいく。

イトのマントが作り出す、夜よりなお深い闇の中、アオイは今しがた見た地獄に怯えて震えた。

イトの剣が築いた光景なのに。

イトから漂う血の香りが、なお、それを近付けるのに。

それでもイトから離れたいとは、ほんの少しも思わなかった。

「イト」

ようやくか細い声が出る。

「イト」

イトは何も答えなかった。

ギョツとイトの首に腕を回し、許される限り身を寄せる。

イトの腕が、それを助けるようにアオイを引き上げる。

それだけで、良かった。

イトの規則正しい歩みが奏でる心地良いリズム。

どう払おうとも消え失せない、凄惨な光景。

その狭間で、アオイは意識を失った。

不意にマントが外された。

限りなく眠りに近い、しかしながら決して心穏やかとは言えない混沌した中を漂っていたアオイの感覚に、突如の解放が与えられる。

重苦しい匂いは木々の青さに。

闇は、目覚めはじめた僅かな光に。

イトの息遣いは、水のせせらぎに。

先ほどまでの世界とはまるで違う明るさに、アオイはむしろイトの胸に顔を伏せてそれを避けた。

少しの間を置いてから、そっと顔を上げる。

そこは既に森の中だった。

ぐるりと木々に囲まれている。緑の合間を、弱々しい朝日が照らしている。

目の前には、川の流れ。

イトはアオイをそつと降ろした。

アオイを見ることがも声をかけることもなく、川に歩み寄り水の中に足を進めていく。

アオイはその背中を、ただ見つめた。

光に下に晒された銀の髪、浅黒い肌…それが、血に染まっている。色濃い衣は彩りを飲み込んでいたが、それにもおびたらしい紅が染み込んでいるのだろう。

イトは衣を身につけたまま、腰あたりまで水に浸かった。

更にすべてを清めるように、頭まですっかりと水の中に埋め尽くす。静かな動作は、川の流れに大きな波紋は描かない。だが、夜明けの光を迎え始めた水に、イトが浴びた返り血が流れ出たのをアオイの視線は見逃さなかった。

しかし、それも一瞬。

川は、すぐさまそれを飲み込み、何事もなかったかのように流れていく。

「イト」

数秒の後、水からゆっくりと現れた男を呼んだ。

「忘れることが増えたな」

イトは背を向けたまま。

まだ、そんなことを言うの？

忘れると？

あの光景を。

水鏡というものを。

そして…貴方を？

アオイは手に持っていたイトのマントを手放すと走り出した。衣が濡れるのも構わず、川へと踏み込む。

穏やかにも見えた流れに、足を取られそうになりながらもイトへと辿り着き、向けられたままの背中にしがみついた。

「貴方が殺したのは、私のせいなのでしょう？」

いつから、私はこんなに多くの問いかけを覚えたのだろう。

この男といると、アオイの中は常に疑問でいっぱいだ。

だが、そのアオイの問いへの、イトの返事はない。

アオイはさらに尋ねた。

「貴方が殺したのは…誰？」

無理なのだ。

何も聞かず、ただ微笑むことなど、もはやできない。

少し前なら。

イトに出会う前なら、何も聞かなかった。

望まれるまま、忘れて。

微笑んだかもしれない。

でも無理だ。

天使などではいられない。

だって。

私は知りたい。

貴方を知りたい。

「イト…あの人たちは…どうして私を？」

イトは振り返らない。

それでも、「…さあな」と答えがある。

知らないのか。

答えたくないのか。

アオイはさらに問うことはしなかった。

それは、どうしても知りたいことではない。

それは、イトが知らないというなら、答えないならそれでいい。

「…私、どうすればいいの？」

ようやく尋ねたいことが分かった。

ようやく、それを口にすることができた。

「俺の役目は、あんたをキリングシークに連れて行くことだ」
背中越しの答えに首を振った。
違うの。

イト、違う。

「その先のことは俺には関係のないことだ」

イトは言って、胸に回されていたアオイの手を外す。そして、手を引いて陸へと歩き始めた。

引かれるままについていきながら、アオイは己の手首を掴む男の指を見る。

昨夜、その指が触れたのだ。

衣越しではなく、直接の肌に。

少しも嫌ではなかった。

むしろ、離れた時の心細さだけが、アオイを苛む。

どうすればいい？

問いの真意は伝わらない。

伝えると言うのは、どうしてこんなに難しいの？

だが、届けなければいけない。

この胸にあるものを。

「イト」

アオイはイトの手に自身の手を重ねた。

「どうすればいいの？」

どうすれば、イトに側にいられるの？

イトに触れて欲しい。

イトに触れたい。

アオイは、イトが…欲しかった。

人も物も、こんな風に欲したことなどない。

だから、どうすれば手に入るのかなんて分からない。

「…お願い、私を拒まないで」

川を出て、離れる大きな手のひらを、頼りない華奢な指で追いつがる。

必死の思いで。

それしか、できない。

「拒む？」

ようやく、イトが振り返る。

感情の読みにくい面に、それでも不審。

「私の微笑みはいらないと言ったの」

それは、私を拒否する言葉？

「天使はいらないって言ったわ」

それは、私を否定する言葉？

「俺の言ったことなんかは…」

言いかけた言葉を遮る。

「貴方がいららないなら微笑みたくない。貴方がいららないなら…天使なんてなりたくないの」

うまく伝えられているかなんて分からない。

でも、言わなければ、カケラも届かない。

「どうすれば…貴方は私を拒否しないでくれるの？」

イトの隻眼が、アオイを見下ろす。

一つの瞳に浮かぶ感情が何なのか。アオイには分からない。
ただ、アオイは目を逸らさなかった。まっすぐに見つめる。

「あんたは今普通じゃない」

やがて、イトは言った。

聞き分けのない子供を、諭す大人の声音だった。

「元の生活に戻れば、何もかも忘れる」

本当に？

戻れるの？

貴方は戻れるの？

私は。

そして、アオイは告げる。

「戻れないわ」

私は、戻れない。

だって、知ってしまった。

貴方という存在を。

私という存在を。

「無理なもの。どんなに望まれても…もう、笑えないもの」

天使ではられない。

何も問わず、何も語らず。

ただ、そこで望まれるままに笑みを浮かべる。

そんな空虚な無邪気さは、もうアオイにはない。

「イト…私は貴方の側にいたい」

イトのせいだ。

地獄から、アオイを救った男。

地獄をアオイに見せる男。

天使などいらないと否定し、上辺の笑みを拒否する。

たとえそれがイトの本意ではなかったとしても。

アオイを天上から引きずり落として、現実をつき付けたのはイトだ。

「アオイ」

イトが名を呼ぶ。

一体、何度目かというくらいに滅多に呼ばれないそれに、甘美さを覚えることもなく身が竦んだ。

「あんたを攫わせたのはウスラヒだ」

イトの声は、まるで感情がなかった。

見つめる先の表情も、また無。

「…ウスラヒがあんたを手に入れるために…男を操った」

何を言っているのか分からない。

分かるのは、一つ。

「…何故？」

それを尋ねる。

「あんたが水鏡の操り手だからだ」

イトは答えた。

だが、アオイは首を振った。

「違うの」

そんなこと、いくら聞かされてもアオイの中に流れ込まない。

アオイの瞳に映るイトの表情だけが、アオイの思考を網羅する。

「どうして…貴方が、そんな顔をするの？」

無の底にある苦悶。

痛みを押し殺すような。

悔恨に押し掛かれていているように。

「水鏡を遺したのは俺だ」

だから。

「あれが今ウスラヒの元にあることを赦したのは…俺だ」

それが、貴方を苦しめるの？

「今、ここにあんたがいるのは、俺が水鏡を遺したからだ」

それが、貴方を傷つけるの？

「こんなことさえなければ…あんたは、天使でいられたのにな」

アオイは首を振った。

そんなことは、今や僅かな望みでもない。

それでも。

ふと視線が落ちる。

「…私が貴方の側にいたいと願うのは…貴方を苦しめるの？」

気がついたのは、そういうこと。

前ならば気がつかずに見過ごしたことに気づく自身を、どう受け止めれば良いのか分からない。

そして、気がついたからと言ってどうすれば良いのかも知らない。

「アオイ…違う」

武骨な指がアオイの頬に触れた。

「あんたが今口にしていることが、いずれあんたを苦しめる」

アオイは口を閉ざした。

「…俺は…あんたを苦しめたくない」

首を振るう。

違う。イト、違うの。

だけど、ようやく動き始めたばかりのアオイの言葉や想いは拙くてまだ、イトに伝えきれていない気がした。

まだ、言わなくてはいけないことがある気がした。
でも。

もう、何も話せない。
なぜなら。

イトの隻眼がひどく痛々しいから。
アオイが何かを言ったたびに、その紫の瞳が沈んでいくから。
だから、もう何も言えなかった。

天使は眠ったようだ。

言葉を覚え始めた子供のように紡がれた数々の問い掛け。
それに残酷な答えを与えたのはイト。

そして、アオイは口を閉ざした。
微笑むこともなく、ただ、黙々と歩く姿は出会ったばかりアオイのようだった。

ほんの数日だ。

この数日で、アオイは変わった。
変えたのはイトだろうか。

否、変えたのはこの異様な状況。イトはその一つに過ぎない。
それが、アオイを変え、その変化に戸惑うアオイは目の前の男に縋っただけだ。

今はイトを求めているも、いずれそれは消えて後悔だけが残るだろう。
う。

その時になって。

縋る腕が拒む腕に変わった時に、あっさりと離してやれるだろうか。
イトは眠るアオイの頬に指を触れる。

滑らかな質感が、硬い皮膚を刺激する。
欲しているのは。

側に、と望んでいるのは。
むしろ、イトの方だ。

己に誤魔化しを許さずに告げるなら、イトはアオイが欲しかった。
アオイよりも明らかな想いの所在。

イトはアオイよりも、よほど自身の中にあるものを理解している。
イトはアオイを手に入れたかった。

美しい娘。

姿かたちではない。

イトをまっすぐに見つめる瞳。

どんなにイトが血に塗れても、なお揺るがない緑の彩り。
それが、何よりも欲しいと。

静かに。

だが、激しく。

いつそ、手に入れてしまおうかと思わぬことはない。
抱いて、墮とすところまで墮として。

だが、頬に触れた指は、それ以上は動かない。
できる筈もない。

この娘は、イトが手に入れて良い存在ではない。
だから、自らに言い聞かす。

これは天使。

ほんの一時、イトの懷に迷い込んだだけの天上人。
明日には、元のあるべき場所に戻る者。

そして。

イトには、魔獣を狩るばかりの日々が戻るのだ。

第7日

陽が昇る。

歩きだす。

森を抜ける。

見えてきたのは、一度として訪れたことのない荘厳な屋敷。

少しの懐かしさもない。

僅かな安堵もない。

だが、それが一変する。

「アオイ！」

聞き覚えのある声。

堅牢な門の外まで駆け出して、アオイへと近づいてくる姿。

「…姉様」

呟いて。

自らの声で、それが姉だと気がつく。

アオイもまた駆け出す。

目の前にある、アオイを拒むかのように振り向かない広い背を通り越して。

アオイよりもいくらか小柄な姿を求めて走った。

「姉様！」

手を伸ばし抱きつけば、同じような強い腕が抱き返してくれる。

戻ってきた。

正確に言えば、ここはオードルの屋敷ではないから、戻ってきたとは違うかもしれない。

でも、この数日間触れ合っていた男ではない…サクラの温もりに日常に戻ってきたのだという実感が急に膨れ上がる。

「アオイ」

柔らかな姉の声。

それは安堵をこそもたらして然るべきだ。

「無事で良かった」

温かな体温はアオイを包んで癒してくれる筈なのに。

いや、もちろん、体の力を抜いて姉に縋ること得るこの安堵感
はアオイを満たす。

だが、同時に訪れる不安。

確実に近づく決別の時。

姉から身を離し振り返れば、少し離れたところで、隻眼の男がひざ
まずき頭を垂れている。

そして、サクラの背後には、数えるほどしか顔をあわせたことな
い軍神と呼ばれる義兄がいた。

「イト様…妹を助けて下さってありがとうございます」

サクラがイトに声をかける。

イトは頭を上げたが、立ち上がらなかった。

「面倒をかけたな」

カイの言葉にもイトは何も言わず、ただ、もう一度、頭を下げただ
けだった。

目の前の3人の男に、イトは全てを語る覚悟を決めていた。
隠しおおせる筈もない。

イトを知る騎士がいる。イトヨウを知る策士がいる。

そして、イトがひざまずく軍神がいる。

だから、知り得る全て…いや、二つを除いて。

アオイの想いと己の想い。

その二つを除いた全て。

今回のアオイ・オールドを取り巻く一件のきっかけが、彼女を手
に入りたいが故のウスラヒの謀であること。

アオイ・オールドが水鏡の操り手としての資格を持ち得ること。

そして、アオイを欲するグレンダの残党が存在すること。

「ウスラヒのことは不問にせざるを得ないでしょう」

タキがカイに確認するように視線を送る。

カイはそれに頷いた。

「それにしても、アオイ様が水鏡を…ですか」

続いた呟きには、イトが応える。

「…どれだけの連中が、それを知っているかは分からねえ」

どれだけのグレンダが、今だ生き様を求めて彷徨っているのか。

イトが殺した男の一人…イトヨウを戦士に育て上げた男が語ったように、頼るものがなくては生きていけぬグレンダは確かに存在する。イトヨウはそれを分かっている、グレンダを切り捨てた。

グレンダは滅びの一族。水鏡はウスラヒが最後の操り手。

生きること望むならば、ここを去れ。

生きることのできぬ者は、ここで果てる。

そう、言い放った。

「天使を攫いに来るか？」

シキが尋ねてくる。

グレンダの名を捨てきれない者達にとって、水鏡は何にも代え難い。ツバクロやセキランのように、イトヨウの言葉を解し、グレンダを捨てて生き抜く道を選んだ者も少なくはないが、ただ、水鏡の跡目が出現したとなると、話は別になってくるだろう。

水鏡への憧憬は、グレンダの終焉を悟った者さえも駆り立てるかもしれない。

「可能性は否定できねえな」

イトは正直に答えた。

知れば、攫いに来る連中はいるだろう。

「…グレンダの残党か…厄介なんだよな」

昨日と変わらぬ飄々とした態度でシキは呟く。

「何せ…腕が立つ。できれば敵に回したくないんだが…」

そして、何か言いたげにイトに視線を寄こした。

その視線の意味を考えることも問うこともなく。

傍らのタキを見る。

「良いのですか？」

タキは無表情のような笑みでイトに問いかけた。

「何がだ？」

策士の問いにイトは慎重に答えた。

語らぬと決めたことを、語らぬために。

「グレンダの頭領として、水鏡の操り手を手中に納めなくとも？」

イトは吐き捨てるように笑った。

今更、何を言うのか。

「グレンダはもうねえよ」

そうだ。

もうない。

流浪の民。戦士の集団。

それは、戦場の作り上げた陰の一族。

道義もなく。正義もなく。

ただ、剣で殺戮を繰り返すことだけで存在を誇示する忌まわしい一族。

帝国キリングシックによって築かれつつある未だかつてない平穏な時代は、戦場でしか生きられない一族の存在を拒否するだろう。

ウスラヒが一族の終焉を予見する前から、イトヨウはそれを感じていた。

己らが滅びゆくであろうこと。

人々は平和な日々に残像のように残る戦場の穢れを、嘲り、呪い、迫害するだろうことを。

そして、それは確かに訪れた。

ウスラヒの予言のとおり。イトヨウの予想通り。

多くの眷属が、意味なく処刑された。女も子供も。

謂れない咎で。

ただ、グレンダというそれだけで。

だから、イトは従う者達に告げたのだ。

生きたいならば、グレンダを捨てる。

大地に根付くも良し。

大海に出るも良し。

そして、剣で生きるのも良いだろう。

ただ、グレンダを捨てろ。グレンダを忘れる。

そして、自らはキリングシークの軍神に忠誠を誓った。

グレンダの頭領。忌まわしい一族を束ねる、平穩の時の中でもっとも忌み嫌われる存在の一つは、軍神に剣を捧げること、自らグレンダを捨てたことを宣言したのだ。

「戦乱の象徴を滅ぼしてやっただろう？」

あの時も、こうして3人を目の前にしていた。

グレンダを滅ぼさせてやる。

キリングシークに屈したと。

殺戮の象徴であるイトヨウの剣は、今この時から、軍神のためだけに振るおう。

だから、散ったグレンダを追うな。

いずれ滅する一族と、捨て置け。

そう望んだ。

「そうでしたね」

イトヨウに対峙し、グレンダの庇護を約束した策士は頷いた。

「私としては、水鏡は少々惜しい気がします」

策士らしいもの言いだ。

「じゃあ、攫えよ。ウスラヒのところに連れて行きゃいい」

イトは言った。

それも、一つの選択肢だろう。

アオイの今後は、多分キリングシークが定めるのだ。

だが。

「貴方に殺されるのは御免ですよ」

タキはそう呟いて微笑んだ。

ちらりとシキを見れば、騎士は軽く肩を竦めてみせただけだ。

「俺の仕事はここに連れて来るまでだ。違ったか？…あとのことは

知らねえよ」

タキは頷かなかった。

シキは何も言わない。

そして、軍神は彩りの違う静かな双眸で、ただ、イトの隻眼を見ていた。

すぐに発つというイトを、止める者がいる筈もない。

早々に部屋を出ると、3人の男は見送るつもりか付いて来た。

どうとも言わずに、イトは彼らに導かれるように一つの部屋の前を通りかかる。

最初に足を止めたのは、シキの筈。そう思いたい。

部屋にはサクラと、そしてアオイがいた。

ウスラヒの元で、身なりを整えたアオイも美しかった。

だが、手慣れた者の手により清められ、極端に華美ではないにしろ身分相応に着飾ったアオイは、紛れもなく貴族の令嬢であり、天使と呼ばれるに相応しい美しさを誇っている。

会いたがっていた姉の傍らで微笑むそれも、決して上辺だけのものではない。

ここで、ああして微笑むことができるではないか。

大丈夫だ。

すぐに忘れられる。

この数日の出来事は、すぐに華やかな日々埋もれていくだろう。

「…声もかけず…か？」

歩きだせば、訳知り顔で騎士が尋ねてくる。

声をかける理由などないだろう。

アオイを中心とした今回のことに、どんな思惑が紛れ込んでいたとしても。

イトにしてみれば、それは一つの厄介事だった。

アオイにしてみれば一つの災難だった。

そして、それはもう終わったのだ。

それで良いだろう。

もう二度と顔を合わせることもない筈だ。

「おい、イト」

シキに名を呼ばれ、その理由を知りながら、イトは足を止めなかった。

だが

「イト」

呼ぶ声が変わる。

この数日ですっかり聞き慣れたそれを無視することはできそうにない。

イトは、諦めて立ち止り、振り返った。

男たちの背後に、アオイが立っている。

カイと双子の側近が、イトの脇をすり抜けていき、アオイがイトに歩み寄る。

振り返ったことに、すぐさま後悔した。

近くで見るアオイはなおさら美しい娘だった。

あの緑の瞳は変わらずまっすぐにイトを見つめている。

少しの翳りもない、そして、イトの側にいたいと願った時の熱を含んだまま。

「…本当に忘れた方がいいの？」

アオイが尋ねる。

イトは、迷わずに答えた。

「忘れる」

全部。

全部、忘れてしまえ。

「本当に忘れていいの？」

言葉が変わる。

イトは隻眼でアオイを見つめた。

「ああ…全部、忘れていい」

そして、穏やかな眠りを。

光に満ちた日々を。

願わくば…せめて、イトのことが悪夢にならねば良い。

「イト」

アオイは俯いた。

迷うように指先が揺れ、それはアオイ自身の胸元で握り締められる。イトはアオイに背を向けた。

あの指がイトの衣を握っていたら、どうなっていただろうか。

「置いてくのか」

少し先で立ち止っていたシキが呟いた。

「…何が言いたいのかわからねえよ」

シキはイトではなく、その背後に視線を向けている。

アオイを見ているのか。

娘はどんな表情で、イトを見送っているのか。

イトは振り返れなかった。

振り返ったら、どうなるかわからない。

「報酬はお望みのまま…と申し上げませんでしたか？」

シキより少し先にいる片割れが言った。

「差し上げますよ。天使でも操り手でも…貴方のお望みのままに」

イトは舌打ちをして、隻眼でシキを見やった。

「…俺じゃない…お前らが分かり易いんだ」

シキはため息をついて、そう告げた。

それは本当なのだろう。

語らぬと決めたことは、言葉にならずとも晒されるほどに。

溢れて零れる。

それでも。

「いらねえよ。…俺には天使も操り手も必要ない」

そう言う以外にないだろう。

「ただの娘だ」

唐突に今まで無言だったカイがそう言う。

「だから、男が一人救われる」

タキの横に立つ背の高い男にイトは首を振った。

「…天使ですよ…だから、俺ごときが手に入れる訳にはいかない」

イトの側では、アオイはいずれ笑みを失う。

明るい場所を求めて、涙にくれる日が来る。

「…サクラが泣くな」

中庭に向かう階段を降りながら、ふとカイが上を見る。

寵妃とその妹の姿は既に見えはしないだろうに。

「…でしょうね…で、貴方は不機嫌になる訳だ」

シキが呟く。

イトは眉を寄せた。

「…俺がどんな生き物か…よくご存じでしょう？」

銀の髪、浅黒い肌はグレンダの証。

傷に塞がれた片目は、グレンダを滅亡に導いた最期の頭領の標。

イトにまとわりつくものは、常に闇を纏う。

「…お前は優秀な狩人で…俺はお前を信頼している。それで十分だ」

カイの言葉はまっすぐに。

アオイの瞳と同じくらいに。

それに幾らも救われながら、それでも日が暮れかかった外に足を踏

み出して、イトは知らずほっと息をついた。

結局、光の下では生きていけぬ身だと改めて知る。

「軍神にそう言っただけで…光栄ですよ」

イトは言っただけで、マントをはおった。

「アオイ」

ハタハタとアオイの瞳から、雫が零れ落ちる。

「姉様」

助けて。

イトがいない。

それだけだ。

たかだか、6日。

そんな短い時間を共に過ごしただけの男が、側にいない。
何故。

どうして、こんなに苦しい。

「…アオイ…」

サクラはアオイを抱きしめた。

妹はこんな泣き方をする娘ではなかった。

美しいが、どこか幻のような現実味のない…天使だった。

常に謎めいた笑みを浮かべ。

周りの喧騒など知らぬげに、そこに佇む。

そんな娘だった。

なのに、今、サクラに縋って泣く娘は、なんて確かな存在なのか。

変えたのは、あの隻眼の狩人？

アオイは、あの人を求めて泣いているの？

「どうしたいの？」

サクラの問いに、アオイははっとした。

どうしたいのか？

それは分かっている。

側にいたい。

イトの側にいたい。

イトに触れて、触れられて。

当たり前のように笑っていたい。

「どうするの？」

姉のそれは、初めての問いだった。

どうすればいいのか。

辿り着いた問いに、イトのくれた答えは。

忘れる。

全て、忘れる。

それだけだった。

だけど。

「…アオイ。貴方は…どうするの?」

サクラの声にアオイは顔を上げた。
どうするの?

私は。

イトの側にいるの。

イトに触れるの。

忘れられない。

忘れない。

なかったことになんて、ならない。

だから。

「イト」

アオイはサクラの腕をすり抜けた。

イトは言った。

アオイの言葉を、アオイが後悔すると。

それでも、いい。

今、こんなにイトが欲しいのに。

来るかも分からない未来に怯えて、否定するなんて。

アオイはバルコニーに向かった。

男は既に旅立ったのか。

まだ、間に合うのか。

「イト!」

サクラは、天使が墮ちるのを見た。

アオイは、バルコニーの手すりを乗り越え、向こう側へと飛び降りた。

「…っな…」

イトは驚きながらも、腕を伸ばした。

そこに、アオイが落ちてくる。

「あんだ、何してんだ!？」

怒鳴る男の首に抱きつく。

「イトの側にいたい」

いつか、この言葉を後悔したとしても。

「イトが欲しい」

この言葉が重荷になったとしても。

「私は貴方が好き」

それでも、今、アオイは自ら選ぶ。

イトという隻眼の男を。

「…お願い…私を置いていかないで」

自ら男の伏せられたままの瞼に口付けた。

「私…貴方といきたい」

行きたい。

生きたい。

否、貴方と行くの。生きるの。

それは、もう決めた。

「もう、決めた」

イトはアオイを見つめた。

そして、アオイを抱く腕に力を込めた。

「…報酬は望むまま…でしたね？」

イトはカイに問うた。

カイの頷きを確認してから、アオイが降ってきた上を見上げれば、
軍神の寵妃が見下ろしている。

「お前の妹は無茶をする」

カイが言う。

サクラは微笑んだ。

「そちらの方のせいだもの。お小言なら、そちらの方をお願いします」

言うなり、サクラは部屋に入ってしまう。

「置いていっても、連れていっても…どちらにせよ、泣くのか」
カイは呟きながらイトの横を通り過ぎる。

そのまま、屋敷へと戻っていった。

「…姉様」

アオイの小さな声がイトの耳に届いた。だが、イトに回した手は緩まない。

「では失礼致します…アオイ様もお元気で」

タキが軽く一礼してカイに続く。

残ったシキはイトの肩をポンと叩いた。

「…助かった…グレンダの残党の相手はせずに済みそうだな」

イトは小さく笑いを零した。

「自分本位だな」

言えば、シキはにやりと笑った。

「俺はお前みたいに聖人君子じゃない」

言われたことのない言葉に、イトは眉を寄せる。

それはイトとは全く対照的な言葉ではないか？

シキは笑みの中で、瞳だけに本気を浮かべた。

「グレンダの頭領は自己犠牲が過ぎる。欲しいものがあるなら、手に入れる。俺たちみたいなのはいつ明日が来なくなるか分からないんだ」

そうして、イトの腕の中のアオイに、貴公子然とした優雅な微笑みを浮かべて話しかける。

「…アオイ殿に私からの貢物です。裏手に翼竜を一頭準備しておきました。どうぞお連れ下さい」

シキはアオイを天使と呼ばなかった。

それに気がつきながら、イトは己を見るアオイに、頷いて見せる。

アオイはシキに向かって「ありがとうございます」と微笑んで礼を述べた。

柔らかな、極上の笑み。

シキは一瞬驚いたように目を見張り、そして、少々決まり悪げにイ

トに視線を当てた。

「じゃあな…今度、会うときは魔獣と一緒にだろうな」

そう言ってもう一度イトの肩を叩き、カイやタキが行った道を辿り始める。

「生きていれば…そうなるだろうな」

そうだけ言って、イトもまた歩き出した。

腕の中に自ら堕ちてきた天使を抱いたまま。

それから

部屋に入ると、アオイは崩れるように胸元へと飛び込んできた。

「…つイト…」

それを受け止めて引き寄せながら、それでも、あと一滴の迷いが、イトの手を止める。

いつだって、決断してきた。

それが、どんな痛みを伴うことであっても…それが己の痛みでも、他人の痛みでも、イトは常に決断を下す側の人間であろうとしてきた。

迷うことなど、愚かとさえ思っていた。

決断しなければ、何も変わらない。

迷うだけでは、何も動いていかない。

この世界に足を踏み出した時から、決断を下し、覚悟を決めてきた。だが、今、イトは迷いを捨てきれない。覚悟を決めきれない。

アオイを手に入れる。

本当に？

本当に手に入れて良いのか。

思い出せ。

イトヨウとは、どんな男だ？

「イト…お願い、私を拒まないで」

迷う男を蔑むこともなく。

決められない男を詰るでもなく。

アオイはまっすぐにイトを見た。

「…私を…受け入れて…」

細い指が、イトに伸びる。

いつもは衣を握るために伸ばされる指先は、今は衣を紐解くために。そして、僅かに現れるイトの浅黒い肌に、触れてくる白い手のひらは震えていた。

「アオイ」

健気な、それでいてどこかに淫らさを含むそれ。

拒みたい訳ではない。

受け入れて欲しいのはイトの方こそ。

イトはアオイの頬を両手で包むと、顔を上げさせた。

僅かに頬を染めながら、それでも、アオイはやはりその真摯な瞳でイトを射抜く。

「俺は、人を殺すことで生き延びてきた…滅ぼすことで生きながらえている」

やはり告げない訳にはいかない。

己が犯した最大の罪。

それを知っても、なお、この娘はイトを求めるだろうか。

「最初に殺したのは10の時…俺の祖父だという人間だった」

血の繋がりがあつたというだけの者だ。

僅かな情もなかった。

しかし、イトが最初に命を絶つたのは、己がこの世にある根源の一つだった。

イトの告白に、アオイは僅かな驚きの表情を見せはした。

だが、その視線を揺るがせはしない。

静かにイトの言葉の続きを待つ。

「神伽の司祭だった男だ…俺の母親は、神伽の巫女になる女だった」
母親は知らない。

一度として会ったこともない。

その女のことで知っているのは、既にこの世にはいないという、たった一つの事実だけだ。

「シンカ」

独特の発音は、言い慣れない者にとって声にするのが難しい。

多くの者と同じ微妙に違う響きを口にしながら、アオイの表情が記憶を辿るようなそれに変わる。

記憶の中に、その名を探しているのだろうか。アオイのように若い

者にとって、それは記憶の奥深くに沈んでいるものなのか。
神伽というそれは、滅びた国の名。

もっとも古い歴史を持つ国の一つだった。

神に仕え、その宣託を人々に告げる者達が集う聖地として、かつては人々の崇拜を一身に受けて栄えた国は、しかし、争いが核をなす時代にあつては存在し続けることはできなかった。

もはや、人々が望むのは見えない神ではないから。

人々は、祈るだけでは救われないことに気がついてしまったのだ。

人々がかしづくのは、戦を制する軍神であり、世界を統べる現人神にとってかわった。

イトが最初に殺したのは、人々に見捨てられ、滅びつつある国に在った、一人の神の僕だった。

「俺の父親はこの姿が語る通りグレンダだ。神伽の女とどうやって巡り合ったかなんてのは知らない。だが、事実、俺は無垢でなければならぬ神伽の巫女となるべき女の腹から産まれて、その女は穢れた者として幽閉された。俺はその女の父親だという司祭に……」

イトは言葉に迷い「……育てられた」

結局、そう続けた。

あれを『育てた』というかは疑問だが。

誰もいない廃墟のような建物の地下。

明かりの灯されていない部屋だけがイトの世界だった。

足を枷で繋がれて。

僅かな食事でかろうじて、生きながらえさせられた。

それだけだった。

そして、あの日は来た。

「ある日、奴はやってきた」

あの日、食事を与える時にしか現れないその男が手にしていたのは、食べ物ではなかった。

「何かを叫びながら、俺に短剣を振り上げた」

イトは、本能的にそれを避けた。

生きたいと願った訳ではない。

そんなことを思う心もなかった。

命があるだけの存在は、その命を護ることだけが全てだった。だから、足掻いた。

もつれ合い。

揉み合った。

短剣がイトの顔めがけて振り落とされ、刃先が左の面を切り裂いた。痛みはどんなものだったか、記憶にない。

そもそも痛かったのか。

それさえも定かではない。

ただ、そこから零れ落ちた血が温かったことだけは確かだ。司祭は、白い衣装を紅に染めながら、再び短剣を振り上げた。何かを叫び続けながら。

多分、一度として人を切りつけたことなどないだろう神の使いは、闇雲に短剣を振り回した。

「俺は、短剣をそいつから奪って、胸を突いた」

男は信じられないように、イトを見つめた。

その後、ずっと付いて回ることになる視線だ。

侮蔑と恐怖と。

今は慣れたそれに、その時のイトは意味の分からない脅威を感じて、胸から抜いた短剣で潰した。

胸を突かれ、両目を失い。

司祭はもがきながら、やがて動かなくなった。

「それが、最初に殺した男だ」

最初に殺したのは、肉親だった。

神に仕える司祭だった。

「兵士じゃない。魔獣でもない。神の名の元に悪魔の子を抜いて来た司祭だった」

ずっと、司祭が叫んでいた言葉。

何を言っているのかを知ったのは、ずっと後のことだ。

あの頃、イトは言葉というものを知らなかった。

『神よ！貴方のお望みのとおりこの子を滅します！』
多分、そう叫んでいた。

『悪魔の子を！』

そんなようなことも。

『どうか神伽をお見捨て下さいますな』

幾度も幾度も。

神の名と共に。

だが、神は司祭を救わなかった。

悪魔と呼ぶ、神の存在など知らない、血の繋がった子に返り討ちにあつたのだ。

神などいない。

そして悪魔も。

あそこに対峙していたのは、己の国が滅びようとするのを受け入れられない男と。

本能で己を護つただけの子供。

そして、あとは歴史が語る。

神伽は滅びた。要となる司祭の一人を失った国は僅か数年でこの世界から姿を消した。

イトは、己の自由と引き換えに、一人の肉親を殺し、一つの国を滅ぼしたのだ。

「それからはグレンダとして、殺すだけの日々だった」

暗闇から光の下に出たのに。

結局、グレンダとして陰に生きることを選んだ。

そして、一族を率いる身になり…瞬く間に今度はその一族を滅亡に導くことになる。

それが最善の決断だと今でも思っている。

グレンダは神伽と同様、この時代には不要なものだった。

神の国はない。

兵の一族はない。

いずれもイトが滅亡に導いた。
多くの犠牲を払い。

そして。

「これからも殺して生きていく」

グレンダを捨ててもなお。

イトはそうやってしか生きていくことしかできない。

「…それでも…あんたは、俺の側にと望むのか？」

イトは尋ねた。

「俺といきたいと願うのか？」

アオイはイトを見つめている。

話している間、一瞬として逸らされなかった瞳は、変わらず…否、
なお深い思いを込めて。

「例えば司祭や他の多くの者が亡くなっても…いくつの国や一族が滅
びても…貴方が生きていて良かったと…そう思っている私は…罪深
いのかしら」

アオイは微笑んだ。

「…私、貴方といきるの」

そして、そう言った。

イトは突き上げる衝動を抑えて、なお言いつのつた。

「一つだけだ」

そう、一つでいい。

「一つだけ約束するんだ」

イトを欲しいと言う。

イトが好き、と。

イトといきたい、とも。

今は喜びで、その言葉を受け止めよう。
だが。

「俺がいらなくなったら言え」

アオイは、言った意味が分からないようだった。

迷わずイトを見つめ続けている瞳に疑問が浮かぶ。

「あんたが望めば…すぐに、消えてやる」

いらなくなれば消える。

そう約束させて欲しい。

でなければ、執着心に囚われて手放せなくなるかもしれない。

それこそが、イトの最も恐れることだから。

今更、罪の一つや二つ増えたところで、何も怖くない。

ただ、イトの側にいることでアオイが苦しむことだけは。

それだけは。

だから、約束しよう。

「約束したら…側にいてくれるの？」

アオイの手がイトの頬を包む。

指先は、もう震えていない。

「ああ…あんたが望むだけ」

イトは答えた。

アオイが望む限り。

そう、約束する。

「約束するわ」

アオイも、またそう告げた。

「だから」

男の頬を包む自らの手に、力と勇気を込めて引き寄せる。

「だから、今は私を抱きしめて」

届く。

唇に、自身の唇を重ねる。

触れることしか知らない口付けを。

「アオイ」

イトは迷いを捨てた。

手に入れる。

誰よりも美しいこの娘を。

「…アオイ…」

アオイの拙い口付けの合間を埋めて、それを激情を煽るものへと。

深く。

熱く。

絡む。

「…つイト…!…」

アオイが崩れて座り込む。

イトは、自らの衣を脱ぎ捨て、アオイを抱き上げるとベッドにもつれ込んだ。

真っ白なシーツに包まれたベッドは、小さな軋み一つ立てずに二人を受け入れた。

結われた髪を解けば、鮮やかな金糸がシーツに広がる。

ドレスを奪えば、シーツよりもなお滑らかな肌が光を放つ。

お互いに何一つ隠さない。

アオイは瞑目するほどに美しかった。

ウスラヒに唆された男は、この美しい娘を真の天使と崇めた。抱くことなど、僅かに思いもしなかったのだろう。

だが、イトは違う。

神などいない。

悪魔などいない。

そして、やはり天使もいないのだ。

いつだって、決断するのは己。

ここに在るのは一人の女。

神ではない。悪魔ではない。天使でもない。

だから、殺すことしか知らない男が一人救われる。

「…つイト…」

伸びる腕。

絡み合う体。

そして、イトは天使と呼ばれた娘を自らの闇へと引き込んだ。

アオイは、イトの胸に身を預けながら、そこにある傷に唇を寄せた。

反応して、男の筋肉が動く。

それが面白かったのかアオイは軽やかな笑いを零して、幾らでもある傷の一つ一つに口付けを施していく。

首筋、胸、腹…好きにさせていたイトは、小さく息をのんで、アオイのその先の行動を止めた。

「それぐらいにしとけて…また、泣かされたいのか？」

イトと繋がって、アオイは涙を溢れさせた。

痛み故かと宥めるイトに、アオイは「…嬉しい」と掠れた声で告げて、男のタガを外させた。

イトの暴走を示すように、無垢だった白い肌には情事の痕跡が色濃く残る。

抱いた身体に跡を残したことはなかった。己の標を残すことを望んだことなど一度としてない。

イトは自らの証に苦笑いを零しながら、その一つにアオイがするように口付けた。

ビクリと震えるのに、だが、アオイは「…後で…」と小さく呟く。

「…後？」

新たな跡をひと際白く思える胸元に落とすと、アオイは息をのんで背を反らした。

素直な娘は、イトの頭を自らの胸元に導くように抱き寄せて。

それでも、イトの問いにコクリと頷いた。

「後で…な」

イトはもう一度目の前の肌に唇を滑らせてから、アオイを離してシートに深く体を埋めた。

その隣に横たわりながら、アオイが尋ねてくる。

「…少し…話をしても良い？」

イトは頷いた。

「ここは、どこ？」

ラジル邸のように堅牢な館ではない。ウスラヒの屋敷のように豪奢でもない。

だが、それなりに身分のある者が住まうべき屋敷は、随分と前に、イトがとある人物からもらい受けたものだ。

「昔…俺を雇っていた男が、報酬だと寄越した」

どという訳かひどくイトを気に入ったようで、幾度となく配下に下れと請われもした。

決まった君主は持たない。決まった棲家がないように。

イトヨウは、そういう生き物だ。

告げると身分ある男は妙に納得したように頷きながら、どという訳か森の奥深くにある、もの好きな貴族の別宅を一つ、イトに寄越した。

「…住む場所なんかいらねえって言ったんだがな…」

結局、受け取った。

誰も近寄らないような場所にある、こじんまりとした造りの屋敷。

イトが訪れると、何も言わず、何も聞かず、ただ最低限の世話をしてくれる無口な下男。

「案外…居心地は悪くない」

何度か、訪れた。

この屋敷をイトに明け渡した男とは、幾度かここで酒を酌み交わし、もした。

あれは風変わりな男だった。

「その方は…今は？」

イトは苦笑いを零す。

「死んだ…俺が殺した」

触れ合うアオイの肌が、ピクリと反応する。

また、一つ。

イトはアオイに己の罪状を告げる。

「戦場で会って…俺はその時、その男の敵だった。だから、殺した」

男はイトの剣を受けながら。

恨み言ではなく。

何故か笑いながら。

この屋敷は遺産だから受け取れ。
そう言った。

「つまらない話だ…俺の昔話はこんな話ばかりだ」

イトが言えば、アオイは首を振って身を寄せた。

何も身につけていない肌が触れ合う。

「…貴方のことで…つまらない話なんて一つもないの」

言いながら触れる唇は目元の傷に。

こうして、また一つ救われる。

イトは剣を置いてしまえばのんびりとした、怠惰と言っても良いような男だった。

何をするでもない。何もしないことが苦痛ではないように。

大きな椅子に座って、ただ宙を眺めている。

床に転がり、窓から空を見つめている。

そんな風な男は、今はソファに寝転がり、瞼を閉じている。

アオイはそのイトの傍らに座って、時々サシャを指先でからかい…

そして、イトにキスをする。

イトは閉じていた瞼を開けた。

微笑み、もう一度口付けを落とせば、大きな手のひらが頬に添えられる。

深くならないキスにもどかしさを覚えることに恥じらいを覚えながら、今は自ら誘うことはしない。

聞かねばならない。

アオイは、もうただ微笑むだけの天使ではないのだ。

この穏やかな日々は捨てがたいが、しかし、聞かねばならないことをアオイは分かっていた。

イトからは、多分切りださない。

アオイから言わなければ、一生聞かないことなのかもしれない。

だが、アオイは聞く決心を固めていた。

「イト」

アオイはイトを呼んだ。

正直な声には、いくらかの緊張がある。

「水鏡というのは何？」

アオイの頬を撫でていたイトの手が止まる。

「私は何をしたの？」

イトは身を起こした。

サシャをアオイの膝の上に乗せる。

少しだけ、考えるように黙り。

「ウスラヒのところで鏡を見たな？」

やがて、決めた男はそう尋ねてきた。

アオイは頷いた。

水を湛えた鏡。

あれが水鏡であろうことは、なんとなくだが察していた。

「水の中の鏡に…イトが見えたわ」

ウスラヒに言われるまま。

見たいものを、と告げられて。

イトの姿を望んだ。

そして、それは水に映し出されたのだ。

「あれは、誰にでも見えるもんじゃない」

アオイは眉を寄せた。

誰にでも見えるものではない、というのはどういうことだろう。

アオイには見えたのだ。

揺れる水の中に、鮮やかな存在が。

「水鏡を操る者は…運命を見る者」

イトはアオイをじつと見ている。

だから、アオイもイトから目を逸らさない。

イトの言葉を、何一つ聞き逃さないように。

表情から、一つしかない瞳から、低い声の紡ぎだす言葉の深いところにあるものまで、全てをきちんと読み取りたい。

「過去、現在、未来。それを、水鏡に映し出す者…水鏡が自ら映すんじゃない。操り手が水鏡に映し出す」

その意味をアオイは考えた。

操り手は運命を見る。

過去を知り。

現在を見て。

未来を視る。

それは、どういうことなのだろう。

たとえば、イトの過去。イトの現在。イトの未来。

どれもアオイにとっては重要なことだけど、その全てを知りたいとは望まない。

だって。

「それは…怖いことね」

そう、怖い。

アオイのいないイトの過去。聞くだけでも、胸を締め付けるような過去。

見たくない。

抱きしめられない過去のイトは見たくない。

そして、もしかしたら、アオイのいないかもしれないイトの未来。そんなの。

絶対に嫌だから。

だから、視たくない。

そんなたった一人のそれらさえ、こんなにも胸が騒ぐのに。

水鏡は、一体どれだけのものを映し出すというのか。

「怖い…か。そうだな」

イトは答えた。

「あんたは水鏡を操った。あんたは操り手の資格がある」

資格がある、という。

それは、選択権はアオイにあるということなのだろうか。

「貴方は…私に何を望むの？」

アオイは尋ねた。

イトは水鏡を継がせたいのか。
それとも。

「俺じゃない。あんたがどうしたいかだ。あんたが、何を選んでも、俺は変わらない」

イトの答えは、いつかの答えに似ている。

笑っても、笑わなくても、変わらない。

そう言った男は、確かにそうだった。

だから、多分、これもそうなのだろう。

アオイが操り手としての道を選んでも、選ばなくても、イトは変わらない。

「それは必要なことなの？」

アオイは問いを変えた。

水鏡は必要なのか。

過去、現在、未来を知る者は必要なの？

「…さあな」

イトは肩を竦めて、そう答えた。

「イト」

意地悪にも思えるそれに、少しの非難を込めて名を呼べば。

「過去も未来も…知らなきゃ、知らないままで現在は動いていく。

知っていたところでどうにもできないこともある。ただ…知っていることで最悪の事態を避けられることがある」

イトはそれを知っているのだろう。

身を持って。

「俺が…司祭を殺した直後にウスラヒが現れた。ウスラヒは水鏡に俺を見たと言った。次代の頭領を水鏡に尋ねたら…俺が司祭に襲われるところを予見したと、そう言った」

初めて見る司祭以外の人間は、片目を潰されたやせ細った子供と、血まみれで倒れている神官を見つめて…何もかも分かっているという顔でイトを抱きしめた。

その言葉を知っていたのなら、多分イトは思い浮かべただろう。
これは天使？

それとも悪魔？

そして、そうではないとやはり知ったのだろう。

「ウスラヒは俺を暗闇から連れ出した。だが、司祭は死んだ」
両方を救う道はなかっただろうか。

そもそもイトなど産まれないようには、できなかったのか。

そんなこと、考えるだけ無駄なのだ。

水鏡は、運命を定めるものではない。

操り手により、大きく動くうねりの一部を映し出す小さな器に過ぎない。

「それだけだ」

アオイはイトの顔の傷に手を触れた。

イトはたくさん傷を持っている。

体にも、心にも。

そのイトが言う。

「それだけ…なのね」

そう。

それだけ。

アオイは水鏡を操ることができる。

ウスラヒがイトを救ったように。

何かできるかもしれない。

だが、司祭が死んだように。

どうしようもないこともある。

それだけ。

それだけなのだ。

キリンググシークにて

いつだったか、イルドナスの大使が真つ青な顔をして跪いていた場所に、今は、その王が膝をついてかشيずいている。背後に控える二人の騎士も同じように頭を垂れている。

その顔は誰も青ざめてはいない。

しかし、常にまとう尊大さは、さすがになりを潜めている。

「この度のこと、我が国の失態にて、誠に申し訳ございません」
王自ら口にする言葉。

どれほどの真意が込められているかは別にして、この若き王の自尊心を大いに傷つけていることは間違いないだろう。

だが、キリンググシークが求めるのは、そんなものではない。

一王の心の傷など、些細なことに過ぎない。

キリンググシークが求めるのは、無益な争いを引き起こさんとする者の排除。

そののみ。

「既にご報告いたしましたとおり、アオイ・オードルは我々が保護致しました」

ハクが告げた。

イルドナスの王は、深く頭を垂れる。

「幸いなことにとある寺院に保護されておりました」

老人の深い声が、まことしやかに語る経緯。

これが、偽りであることは、王も承知だろう。

だが、それを指摘することなどない。

指摘することは、即ちアオイの居場所を知っていたことに繋がる。

「ただ、今回のことはよほどショックだったでしょう…少々錯乱されており、未だ詳細が語られることはございません」

続けるそれは蜜。

イルドナスへの、甘い餌だ。

アオイから事の真実が語られることはない。

故に、イルドナスが最も隠したいと願っていることは、世に出ることは妨げられるだろう。

そんな、餌を目の前に差し出した。

「我々としても、これ以上アオイ殿を苦しめるのは本意ではございません」

王は頷いた。

ハクは玉座に座る皇帝と、その横の軍神を見た。

いつかと同じように、悠然とそこにある二人の姿に気持ちを落ちつけると、教えられた名を口にする。

「ところで…ラファロ・ゴートン、という名をご存じでしょうか？」

先ほどちらつかせたのは餌。

ならば、これは。

剣だろうか。

毒薬だろうか。

若き王殿に、手中にあるそれを見せて。

威す。

「…存じませんが」

イルドナスの王は、顔色一つ変えずに答えた。

本当に知らぬのかもしれない。

下っ端なの衛兵の名など。

だが、控える騎士の一人が僅かに肩を揺らしたのを、そこにいる男達は見逃さない。

「さようですか…イルドナスの衛兵です。アオイ・オードルを保護した際、側におりました」

イルドナスの王は少し肩を揺らし。

「…その者が、アオイ殿を攫ったのでしょうか」

しらじらしいと思える問いを口にする。

だが、それはこちらも同様。

「さて、どうでしょうか…この男も、さほど多くは語りません」

ハクは答えながら、その男を思い出していた。
シキに請われて訪れた場末の宿は、過去に戻ったかのような幻影を
抱かせる地獄だった。

転がる遺体と充満する血の匂い。

その中に、件の男がいた。

恐怖に引き攣った顔と震える体で。

愛国心も忠誠心も粉々に砕け散った惨めな体で、全てを洗いざらい
白状した。

天使のような娘を殺せ、と命じられた。

もしも、誰かが共にあれば、その者も消し去れ、と。
だから、町のゴロツキを雇った。

男と女の二人連れ。

難しい任務ではないと、そう思っていたのに。

あれは何だ？

あの男。

あれは人か？

一瞬の迷いもなく、首を刎ねた。

逃げようとする者さえ、容赦なく。

すべて、一太刀。

成す術など、あろう筈もない。

あれは、悪魔か？

人を象った魔獣か？

一つ目の…あの男。

あんなものが…この世に、いるのか？この世は、まだ戦乱の真つた
だ中なのか？

錯乱したように告げられるそれが、隻眼の狩人のことを言っている
のだと気がついた。

イトヨウ。

その男がどんな人物かは、ハクも知っている。

かつては戦の象徴のような一族を束ねていた男だ。

恐ろしいほどに腕の立つ狩人。
だが、知らなかった。

暗闇の中、剣を振るいながら、生かすべき人物を見定める男なのだ。
荒くれのような顔をして。

恐ろしいほどに冷徹に。

「…既に語れる状況にもありません…自ら命を絶っております故」
本当は違う。

絶え絶えな息の中、語るべきを語り男は絶えた。

イトの与えた傷は…一時を生かすだけのものだった。

僅かな言葉を語る時間を与えただけ。

確かに、恐ろしい男だ。

悪魔のように冷酷に。

魔物のような残忍さで。

平穏な時をあつけないほどに簡単に打ち崩す。

その男が、軍神に忠誠を誓っていることに、ハクは心の底から安堵
していた。

「イルドナスの王よ」

静かな、物音一つしない空間。

それに若々しくも、深淵な声が響き渡った。

皆の視線が一斉に皇帝へと注がれる。

「貴殿としても…真相は知りたいところではあるのだが…」

皇帝は静かに立ち上がった。

背丈は隣に立つ軍神とさほど変わらない。

キリングシークの双壁の頑強さに畏怖を覚えるかのように、イルド

ナスの王は身を慄かせ再び頭を垂れた。

「どうか、そっとしておいてやって欲しい」

柔らかな言葉。

荒れることのない声。

だが、それは全てを決定する。

「承知してございます」

イルドナスの王は答えた。

これは、若き王の望むとおりの展開だろうか。

「さて…イルドナス王殿」

皇帝は再び玉座にゆつたりと座ると、跪く同盟国の王に声をかけた。
「せっかくおいで頂いたのだ…今日は、ゆつくりとしていかれるが
良い」

心中、早く国に帰りたいと願っているだろう王は、それでも深く頭
を下げて礼を言い立ち上がった。

二人の騎士を従えて、頭を下げる老臣の前を軽く会釈をしながら通
り過ぎ、その横に控える端正な容姿の双子の前を通るその時。

「そういえば、何時だったか王のお側に控えていらつしやった騎士
殿は御達者ですか？」

一人が不意に問い掛けた。

イルドナスの王は一瞬にして身を強張らせる。

騎士然とした身なりの男は、まるで剣の振るい方など知らぬとても
言うような、穏やかな笑みで続ける。

「確か…名は、レオン・バロス…殿でしたか」

その名は。

王の側近中の側近だった男の名。

高貴な家に生まれおち、王の信頼を得て。

何一つ欠けるところのないような男だった。

そして、信心深い男だった。戦の最中でも、祈りを欠かさぬような
死に致しめた敵に弔いの言葉を呟くような。

そんな男だった。

「…彼は少々体調を崩しており…自宅で療養しております」

王は、己の声が震えているようにも聞こえた。

騎士は、ことさらに心配げに眉を潜めてみせた。

「それはそれは…残念です。何度か戦場でもまみえましたが、素晴
らしい騎士ですね…今ならば、ゆつくりと酒でも酌み交わしたいと
思ったのですが」

国間が友好であれば。

そう含んで言うキリングシークの騎士の横で、同じ顔のもう一人が柔らかな物腰で語る。

「確か、侯爵家のご子息でいらっしやいましたね。将来はイルドナスの重臣になるうかというお方…さぞかしご心配でしょう」

この双子は。

キリングシークは。

全てを知っているのか。

その信心深さ故に、道を誤った男の存在を。

天使に魅入られ、全てを失った男を。

知っていて。

片手に餌をぶら下げて、片手に剣を掲げるのか。

「…失礼します」

双子の言葉に、王はもはや平常心を保つことは難しいと感じていた。逃げるように謁見室を出ながら、王は敗北を認めた。

この世の頂点はまだキリングシークに定まった訳ではない。

この強大な帝国に取って変わることは、夢想ではない。

だが、イルドナスとて、完全に復興を成し遂げた訳ではないのだ。

信頼する重臣の裏切り。国の威信につく傷は小さくとも。

小さな綻びが国を滅ぼしかねない。

他国に、例えばどんなに小さくとも、イルドナスの傷痕を晒す訳にはいかないのだ。

今は、敗北を認めて、キリングシークに膝まづくべきだろう。

「…御苦労だったな」

予定どおりの牽制をイルドナスに与えた重臣達に、皇帝が労いの言葉をかけた。

「これで少しの間は大人しくして下さるでしょうな」

ハクの言葉にガイは微笑む。

「そうだと良いがな」

そうして、傍らに立つ弟を見上げたが、カイは軽く頷いただけだった。

相変わらず言葉の少ないことを気にするでもなく、ガイは続けた。

「…で、天使殿は今どこにいる？」

尋ねると、カイは「…さあな」と答えた。

それに驚いて言葉を発したのは、ハクだった。

「カイ様！？さ、さあな…とは」

もつともな反応の筈だった。

だが、この部屋でうるたえているのはハクだけだ。

ハクは、近くにいたシキに詰め寄った。

「どういうことだ！？保護しておるのではないのか！？」

シキは「…翔んで行ってしまったというか…堕ちていったというか…」と、訳の分からない答えを寄越した。

らちが明かないと、タキを見れば。

「どこに居るのは存じませんが、お元気の筈ですよ」

きっぱりと、だが、何の答えにもならない答えが返ってきた。

この双子が、のらりくらりとすり抜けていくのが得意なことは分かっていたことだ。

「ガイ様！」

ハクは、少しの焦燥感も感じられない皇帝に縋った。

「私はその天使殿に何をしてやれる？」

ガイは傍らの弟に尋ねた。

翔んでいったという天使。

堕ちたという天使。

その天使に、少なくとも今現世でもっとも力を持つであろう皇帝は、何をしてやれるだろうか。

「何も」

カイは短く答えた。

「何も？」

どんな力を持った者でも。

あの天使には、何もしてやれることはない。

天使が望むのはたった一つだから。

「何もしないことが唯一できることだ」

悪魔と呼ばれる男の傍らにあること。

一人の男の側に。

一人の女として寄り添うこと。

天使と呼ばれた女が望むのはそれだけだ。

皇帝が何をしてやれるというのか。

「分かった」

頷く皇帝は、老臣にも納得するように視線を投げた。

老臣は、少しの間何か言いたげにしてはいたが、やがて諦めて頷いた。

そして

ウスラヒの屋敷が見えてくる。

遠くからは木々に隠れるように見えないのに、近づけばそれは屋敷の主を護る頑強さと、主に似た華やかさを備えてそびえたつかのようだ。

何度と訪れながら一度としてそこを棲家だと思ったことはなかったが、今、その屋敷はイトにとって何よりも安らげる光景となって視界に映る。

あと少しだ。

あと少しで。

イトの足が想いに急かされて速まるその音が聞こえた訳でもあるまいに。

「イト！」

娘は門から飛び出してきた。

真夏を過ぎた季節に相応しい薄手の、だが肌を晒さないドレスをフワフワと揺らしながら、待ちきれないとばかりに駆け寄ってくる。

「イト、おかえりなさい！」

それは、この娘だけに、許された言葉だ。

そして、胸に飛び込んでくるのを軽々と受け止める。

どうやらアオイは、まだ己を必要としているらしい。

そのことに安堵するのを戒しめながら、柔らかな体を抱き上げることは止められなかった。

「おかえりなさい」

もう一度その言葉を、今度は囁くように。

そして、首にしがみつく体は、柔らかく温かい。

すぐにでも食りたい衝動。

生きているのだと。

一緒に生きていると、確かめたい。

そんな想いを抑えながら、アオイを抱いたまま屋敷へと足を進める。
「元気だったか？」

今度の狩りは、少々長引いた。

以前から感じていた魔獣への違和感は日に日に強まるばかりだ。

ウスラヒが必死になってアオイを手に入れようとした理由を、イトは現実に見始めている。

「そんな風に聞くほど離れていたことを反省して」

アオイは更にぎゅっとイトに抱きついた。

寂しかったのだと、その力が語る。

「これが俺の生業だ」

分かっているというように頷く娘の頬に、軽く口付けを落とした。
滑らかな感触が、生きている実感の欠片を与えてくれた。

屋敷の扉口に、ウスラヒが立っていた。

イトを暗闇から救った時から何一つ変わっていないように見える姿が、今までとは少し違う瞳と笑みで馴染みの来訪者を受け入れる。

「よく、来たね」

言葉は今までどおり。

イトがここに帰ってきた訳ではないことを知っている女は、その言葉の口にしない。

そして、以前ならば与えられた目元への口付けも、今はない。

イトはアオイを降ろした。

「また、世話になる」

ウスラヒは頷いた。

「そうしておくれ。あんたがいた方がアオイがきちんと水鏡を視る」
呆れたように言いながら、イトの傍らのアオイを見やる目にはからかうようなものが浮かぶ。

「そうなのか？」

イトもアオイを見下ろした。

アオイは、小さな子供が拗ねるようにツンと唇を尖らせた。

そこに口付けたい想いに駆られるが、今はだめだと言い聞かせる。
「あんたが側にいないと、どうしてもあんたを探しに行ってしまうんだ。困ったもんだよ」

言葉ではそう言うものの、ウスラヒは微笑んでいる。

アオイを、そしてイトを、優しく見守る笑みだ。

「だって」

何を反論してくるのかと、二人のグレンダの生き残りが見守る中。

「見えてしまうんだもの」

子供の言い訳が、拗ねてはいても形の良い唇から出てきた。

ぷつと噴き出したのはウスラヒ。

イトは肩を竦めた。

「まあ、いいさ。なんであれ、水鏡が見えていることには違いない
…アオイは優秀だよ」

ウスラヒの言葉に、イトは何も言わず、そして頷きもしなかった。

結局、アオイは選んだ。

イトの話を聞き、自ら水鏡の操り手となることを選択した。

アオイがどれだけ水鏡を操るということの怖さや重さを理解しているのか…イトには、正直よく分からない。

だが、イトはアオイの決めたことに、何も言うつもりはなかった。

だから、アオイの決めるまま、水鏡の元へ…ウスラヒの元へとその身柄を預けた。

イトに連れられて現れたアオイを見たときの、ウスラヒの驚きの表情は意外なほどだった。

水鏡の操り手にも予想だにしない状況だったのだろうか。

天使と呼ばれる娘が、無頼の男と共にあることを望んだ。

水鏡の操り手となることを決めた。

それは、ウスラヒの見ていない未来だったのだ。

水鏡の操り手は、やはりそれだけのものだ。全てを知り得る者ではない。

「…俺は、水鏡は滅ぶべきだと思っている」

あの時、アオイをウスラヒに渡しながら、イトは告げた。
グレンダを解放した時の思いは何も変わっていない。

「だが、水鏡が足掻くなら…アオイが、それを受け入れるなら…それも良いだろう」

ただ、これは公にはするな。

やがては何処には知れようが、あえて明らかにするな。
それを頼りに、集おうとする輩を受け入れるな。

世界で動きつつある異変を垣間見るだけの水鏡であれ。

この世を動かすのは人であり。魔であり。そこかしこ溢れる全てのものだ。

水鏡は、その断片を映し出す…小さな鏡なのだ。

「イト」

黙っているイトの衣を、ツンと指先で引つ張る。

隻眼が自身に向けられたのを確認してから、アオイは心中にある言葉を告げた。

「本当は…水鏡の中のイトを見るのはいや
でも。」

「…知らないところで、いなくなってしまうのはもつといや」

そう、アオイは知らず知らずのうちにも覚悟している。

イトが死ぬのは…アオイの傍らではないのだろう、と。

この男は魔獣を狩るのが生業なのだ。

常に剣を携えて、あの地獄絵図の一部として生きている。

「私、貴方を私の元に戻すために…水鏡を見ている」

アオイはそれだけを望んでいるのだ。

そのためだけに、水鏡に姿を求める。

「そして…貴方の最期を見届けるために…水鏡を見ている」

どうにもならないことがある。

イトがそう言った。

ならば、せめて、そう言う男の最期を見届けるために。

「他なんて…知らない」

ウスラヒは、頷いた。

「それで構わないよ…その男は、動く世界の一部だ」

イトはアオイを抱き寄せた。

この娘は、イトが思っているよりも、ずっと…そう、人らしい。

身勝手にも思える一途さが、それ故に美しい。

溢れ出る愛しさと、迸る欲望に耐えきれず、イトはアオイを抱きあげた。

「…ウスラヒ…しばらく、ここには戻さねえから」

そう言っ出ていく男をウスラヒは黙って見送り、そして、足元にある水鏡を見下ろした。

かつて、ここに映った次代の頭領は、闇の中に浮かびあがる血に塗れた子供だった。

それを拾い上げた。救ったと、その時は思ったのだ。

だが、違った。

手元に置いた。

抱きしめもした。

母のように。時に恋人のような思いさえ秘めて。

子供は一人の大人になり、一族を率いる地位にまで申し上がった。

だが、何も救いにはならなかった。

悪魔とも、神とも呼ばれた女は、一人の子供を…男を救うことはできなかった。

「アオイ・オールド」

ウスラヒの呟きに、水鏡は音を上げて跳ねた。

あの娘は、見事に水鏡を操る。

一人の男を見るためだけに。

その死を見届けるために、現在を。

そして、救うために、未来を。

その男を己の元に戻すためならば、いくらでも水鏡を操るのだ。

僅かな戸惑いもなく。

指先を水に滑らせる。

他は知らない、知らない、迷いなく。

その残酷な一途さが。

傲慢とさえ言える無垢さが。

やはりウスラヒに一つの言葉を思い浮かべさせる。

幾度と男に否定されようと。

アオイは、ウスラヒにその存在を思わせる。

それは…天使。

そして（後書き）

終わりました。

難産でしたあ（苦笑）

当初のテーマは一目惚れ…の筈だったのです。

『軍神の花嫁』が、長い時間をかけて結ばれたので、今回は短時間で結ばれてしまう怒涛のようなジェットコースターのストーリーを展開したかったのですが。

うーん、微妙だ。

最後までお付き合い頂いた読者の皆様、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2207j/>

天使の堕ちる夜

2010年10月8日13時13分発行